ヒトを見るように サルを見る

河合香吏
竹ノ下祐二
編

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 フィールドサイエンス研究企画センター
「フィールドサイエンス・コロキアム」

科学研究費補助金基盤研究（S）
「社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 基幹研究
「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探究 — 人類学における
ミクローマクロ系の連関２」

ヒトを見るようにサルを見る

日　時：2020 年 9 月 5 日（土）13：15 ～ 18：00

場　所：オンライン

共　催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
フィールドサイエンス研究企画センター
「フィールドサイエンス・コロキアム」

科学研究費補助金基盤研究（S）
「社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探究―人類学におけるミクロ-マクロの連関 2」

ヒトを見るようにサルを見る

司会：川添　達朗・竹ノ下　祐二

Ⅰ　挨拶　河合　香吏（東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所）　1

Ⅱ　趣旨説明　竹ノ下　祐二（中部学院大学）　3

Ⅲ　発表

発表１「オランウータンの食物分配とヒトの『贈与』の連続性」　8
田島　知之（京都大学・宇宙総合学研究ユニット）

発表２「『愛と平和』の類人猿ボノボにおける、集団間攻撃交渉パターンが示すオス間競合とメスの協力」　19
徳山　奈帆子（京都大学・霊長類研究所／野生動物研究センター）

発表３「野生ニホンザルの離乳期の子育て」　31
谷口　晴香（東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所）

Ⅳ　コメントと発表者からのリプライ

コメント１　田辺　明生（東京大学）　36

コメント２　中川　理（立教大学）　42

コメント３　松村　圭一郎（岡山大学）　47

発表者からのリプライ　52

Ⅴ　総合討論　57

（川添）　時間になりましたので始めさせていただきます。

皆様、本日は、フィールドサイエンス・コロキアムにご参加いただきありがとうございます。本日、全体司会を務めます、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の川添です。よろしくお願いします。コロキアムの開始に先立って、お願いと注意事項についてご案内いたします。会の円滑な進行のために、発言者以外はマイクとカメラをオフにしていただき、スクリーンショットや動画の撮影はご遠慮ください。発表者への質問は、総合討論の時間にまとめて行います。総合討論の時間にZoomの「手を挙げる」機能を使って、司会者の指名を受けてから、マイクとカメラをオンにしてご発言ください。事実確認等の簡潔な質問は発表中にチャットに投稿していただいても結構です。時間に余裕があれば、発表後に短い質疑を行います。

本研究会の報告書を作成するために、主催者側で研究会の記録を行いますのでご了承ください。報告書を作成する前に、ご発言いただいた方には内容の確認をお願いいたします。その際に、発言の修正や削除等を希望される方はお知らせください。

それでは、2020年度第1回フィールドサイエンス・コロキアムを開始したいと思います。まず初めに、本企画の共催の一つである社会生科研から科研代表者の河合さんにご挨拶をお願いいたします。

Ⅰ　挨　拶

河合　香吏
東京外国語大学・アジア・アフリカ・言語文化研究所

ご参集ありがとうございます。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の河合香吏です。本日のフィールドサイエンス・コロキアムと共催の科研費「社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」の代表をしております。今日は皆さま、どうぞよろしくお願いいたします。

今日のコロキアムは本科研の分担者の竹ノ下祐二さんが企画してくださり、発表者の田島さん、徳山さん、谷口さんは若手の協力者です。われわれの科研については長々と説明はしませんが、端的に言えば、今言いましたタイトルにありますように人類学と霊長類学の協働を軸として社会性の起原と進化という課題に取り組もうとするものです。

もともと私は人類学者と霊長類学者が同居する研究室で育ちました。理学研究科の動物学

教室、人類進化論研究室というところです。私は人類学の方に進みましたが、人類学といっても人文系の文化・社会人類学とは少し違っていて、区別するために生態人類学と言ったりするのですが、そこでは人間の生物学的な側面に着目したり、人間を生態系の一員と捉え、自然とヒトの相互作用の解明を目指すなどの特徴があります。他方、日本の霊長類学は西欧の霊長類学が動物行動学 ethology の系譜から生まれたこととは異なり、サルにも社会や文化、時には歴史すら認める広義の人類学として始まりました。

そのような人類学と霊長類学の研究者が「進化」という１点で結び付いているという信念のもと、同じ研究室で机を並べ、一緒にゼミをし、夜中のゼミ室で遅くまで議論をする。同じ場で、同等の資格で討論するということがふつうにされていて、そこではサルとヒトの連続性と非連続性の両方を見ていこうという姿勢が徹底されていました。そうした中で、「ヒトを見るようにサルを見、サルを見るようにヒトを見る」という視点が共有されていたように思います。そんな話をしていましたら、昨年度のコロキアムのタイトルが「サルを見るようにヒトを見る」になってしまいました。そして、今年度はもう片方の「ヒトを見るようにサルを見る」を続編としてやろうという話になりました。

ただ、このあとすぐにオーガナイザーの竹ノ下さんから趣旨説明があると思うのですが、「ヒトを見るようにサルを見る」というと観察や調査法に関する議論と思われそうですが、今日の企画はそうではなくて、フィールドで見たこと、観察したことをどのような言葉で語るかという問題を議論しようと目論んでいると聞いています。それは霊長類学の問題であるだけではなく、異なる文化・社会を研究対象とする人類学においても翻訳可能性／不可能性という重要な問題としてある、共通の大切な課題だと思います。

今日はコメンテーターとして、こうした企画に興味を持ってくださる第一線の文化人類学者のお三人をお呼びしていますし、有意義な議論が展開される場になることを期待しています。以上でご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

（川添）　河合さん、ありがとうございました。続きまして本コロキアムの企画者の竹ノ下さんより趣旨説明を頂きます。竹ノ下さん、よろしくお願いします。

Ⅱ　趣旨説明

竹ノ下　祐二
中部学院大学

皆さん、こんにちは。このたびコロキアムの企画をさせていただいた中部学院大学の竹ノ下と申します。発表に先立ちまして少しの間、趣旨説明として私自身の問題意識についてお話をさせていただきたいと思います。

（以下スライド併用）

＃2

先ほど河合さんからもありましたが、このタイトルは私が考えたものではありませんということを初めにお断りしておきます。これは与えられたお題です。

＃3

わざわざそんな言い訳から入る理由は、現在の霊長類学において「ヒトを見るようにサルを見る」ということは、一般的にはすべきではないことだと考えられているからです。第1に、それをすると擬人主義だと批判されます。第2に、それをするとサルをヒトとの対比で捉え、ヒトとの差分にのみ注目し、結果として対象であるサルそのものの理解の妨げになるということもあるからです。今日もご参加くださっていると思いますが、中村美知夫さんが『チンパンジー』という本の中でそのことに警鐘を鳴らしていらっしゃいます[1]。ですので、このお題は率直に言って陳腐なお題だなと、私自身は思っています。

＃4

もっとも、このお題が科研費の審査員の目を引くためのキャッチコピーに過ぎないということも理解しています。このお題の言わんとするところは、人間を見るようにサルを見たいということではなく、ヒトとサルを同じやり方、同じ方法論で見たい、理解したいということだと思います。

「見る」というと霊長類学者の多くは観察するとかデータを取るということに限定して捉えがちです。しかし、霊長類学と文化・社会人類学とが観察法やデータ収集法を共有しようとするのは困難というか、ほとんど無理です。このことは昨年11月の河合科研のキックオフシンポでも少し議論しました。

そこで今回は「見る」ということをもう少し広く捉えてみたいと思います。広い意味での「見る」という行為は、フィールドにおいて対象を観察する、あるいは話を聞く、そして見たこと、聞いたことをフィールドノートに記録する、さらにその記録されたことやデータに基づいて対象について表現するという一連の行為の連鎖の全体を表すと考えたいのです。すなわち、「見る」ということを「語る」を包摂した概念として捉えます。そして、今回は「語る」ことに焦点を当てたいと思います。

＃5

すなわち、今日は「ヒトを語るようにサルを語る」ことについて議論したいと思います。

＃6

もちろん、「見る」を「語る」に変えたら何をやってもいいということにはなりません。ヒトを語るようにサルを語ることは、当然、擬人主義として批判されます。私たち霊長類学者は、一般向けに分かりやすく何をか語ろうとする際に擬人的表現を用いることは多々ありますが、論文や学術書では用語の定義を明確にし、客観的な表現を用いるのが通常です。

＃7

しかし、最近ではそうした学術的議論において擬人主義的用語を避けるという慎重さが薄れてきているように感じることがあります。学術誌に掲載される論文の中にも、暴力や共感、レイプ、ハラスメントという一見、擬人主義的な用語が、その論文の中で明確な定義や、「なぜその言葉をあえて使うのか」という理由を提示せずに使われる頻度が増しているように思われます。この変化について、これまであまりきちんと検討されてこなかったのではないでしょうか。

＃8

推測ですが、理由の一つは、文化・社会人類学者がかつてのようにサルを擬人主義的に語ることについてあまり批判的でなくなってきたということがあるのかなと思います。むしろ、歓迎するようになってきている。その背景にはマルチスピーシーズ人類学のような社会を構成する主体としての属性をヒト以外の生物や物象にも広げていこうという流行があるのかもしれません。

あるいは、脳科学や認知科学の成果が動物に対して擬人主義的な用語を当てはめることに、ある種のお墨付きを与えているということもあるかもしれません。このあたりは推測に過ぎないので、後でコメントいただければと思います。

＃9

一方で、生物学者の側からも擬人主義的表現を回避する必要はないという意見を言う人が出てきました。動物行動学者のオルコックはこのように述べています。「社会生物学の読者は、お望みとあれば、『強姦』のかわりに『強制交尾』、『不倫』のかわりに『複数交尾』といったような、より感情的に中立な言葉に心の中で読み替えてくれればよい。そうしたからと言って、意味が失われることはないだろう[2]。」

今日参加している若手の霊長類学者の方の多くは、おおむねこの見解に同意されるのではないかと思います。しかし、これは危険なレトリックだと思います。「強姦」を「強制交尾」と言い換えても構わないというところに問題があるのではなく、「強制交尾」を「強姦」とあえて書くところに問題があるからです。その書き換えを行う際に付加される意味について、オルコックは明らかに無頓着です。

＃10

とはいえ、オルコックの研究対象は昆虫が中心で、彼自身、昆虫の「強制交尾」と人間社会の「強姦」を関連付けたいわけではありません。ならば、われわれは彼を真剣に批判する必要はなく、単に悪趣味な人だなと思っていれば済むわけです。

しかし、霊長類学者、進化人類学者が、こうした無頓着で悪趣味なことをやってはならないと思います。サル屋は実際にチンパンジーの「群れ間攻撃」からヒトの「戦争」を、あるいはサルの「寛容性」からヒトの「平和」や「共存」を論じようとするわけです。これを単なる言葉遣いの問題といって逃げることはできません。こういったことが、私が描いている問題意識です。

＃11

今日はその問題意識に沿って、「贈与」「育児」「暴力」という三つのこと、これらは岩波『行動生物学辞典』には項目のない人間社会の言葉ですけれども、この三つの用語を取り上げて3名の若手霊長類学者の方に、私の問題意識を事前に説明して、ある程度理解してもらった上で、あえてこれらの言葉と関連付ける形でご自身の研究から話題提供をしていただきます。それに対して3名の文化人類学者の方に、演者の皆さんによるこれら「暴力」「贈与」「育児」の意味付けや使い方が、文化・社会人類学におけるこれらの言葉の使い方、あるいは意味付けられ方と同じなのか、違うのか、違うとしたらどう違うのか。すなわち演者の皆さんが、きちんと「ヒトを語るようにサルを語」れているかを中心にコメントいただきたいと思います。それによって、サルとヒトとを真に同じ言葉で語るための土壌をつくることを目指したいと思います。

今回、演者のお三方には事前に発表資料を見せていただきましたが、ご自身の研究内容とこれら三つの言葉との接続の仕方は三者三様であると思いました。そのこと自体、サルとヒ

トとを接続するやり方が一つではないということを表しているのではないかと思います。

＃ 12

最後に、蛇足ながら企画者として参加者の皆さんに、少し上から目線で恐縮なのですけれども、注意を促したいことが 2 点ございます。

＃ 13

まず、一つ目は冒頭でも述べたように「サル」を「ヒトと似て非なるもの」という抽象的な概念として捉えてほしくないということです。三つの話題提供ではオランウータン、ニホンザル、ボノボという実体を持った互いに異なる動物種のお話がされます。ヒトとの差分でのみ捉えるという観点から脱却したいと思います。

＃ 14

二つ目ですが、これも今日ご参加いただいていますけれども、高畑さんが『性の人類学―サルとヒトの接点を求めて』の中でこのようなことを述べていますけれども、私たちはしばしばサルの中に自分自身を見出し、サルそのものではなくサルを通して見えた自分を語ってしまいます。議論の方向性をあまり縛りたくはないのですけれども、特に総合討論において言葉遣いに引きずられて、サルを見る、あるいはサルを語るつもりが、ヒトを語る、自分を語るという陥穽に陥らないようにしたいと思います[3]。今日はサルを語りましょう。

＃ 15

結びとして、『シートン動物記』の一つ、「ぎざ耳坊や（ワタオウサギの冒険）」というお話の中の一節をご紹介して趣旨説明を終わりたいと思います。「読者におかれては次のことを心にとどめていただきたい。私はこの話を物語るに当たり、ウサギ語を思う様、英語に翻訳しているが、彼らが実際に言わなかったことを何一つとして付け加えてはいない」（竹ノ下訳）[4]。以上です。

引用文献

1. 中村美知夫『チンパンジー　ことばのない彼らが語ること』中央公論社，2009 年.
2. オルコック J.『社会生物学の勝利―批判者たちはどこで間違ったか』長谷川眞理子（訳）新曜社，2004 年.
3. 高畑由起夫「『性』をいかに語るべきか―少し長い序論」『性の人類学』高畑由起夫（編）世界思想社，1–9 頁，1994 年.
4. Seton E. *Wild Animals I Have Known*. Charles Scribner's Sons, 1898.

（川添）　竹ノ下さん、ありがとうございました。

では、早速お一人目の発表に移りたいと思います。京都大学の田島さんから、オランウー

タンの「贈与」について発表いただきます。田島さん、よろしくお願いします。

Ⅲ　発　表

発表１「オランウータンの食物分配とヒトの『贈与』の連続性」

田島　知之
京都大学・宇宙総合学研究ユニット

よろしくお願いします。
（以下スライド併用）

＃１
このようなタイトルで発表させていただきます。京都大学宇宙総合学研究ユニットの田島です。よろしくお願いします。

＃２
私は東京外大のある府中市出身です。ですので、外大の先生がよく「こんな田舎まではるばるお越しくださってありがとうございます」などとシンポジウムで言うと非常に複雑な気持ちになりますが、そのあたりの出身です。
京大の人類進化論研究室に入りまして、現在は京大の宇宙総合学研究ユニットに勤めております。なぜ宇宙かということをよく聞かれるのですが、京大の宇宙ユニットというところは異分野融合による宇宙に関する新たな学問領域をつくりましょうということで、山極さんの前の総長の時代に設置したものです。人類は宇宙でいかに生存できるかというテーマを柱として掲げてやっています。今日ご参加の木村大治さんも、このユニットで私よりはるか前から宇宙人類学の研究をされたりしています。私は霊長類学（自然人類学）の立場から、宇宙研究との接点を見つけたいという立場でやっています。

＃３
早速、今日のテーマの「贈与」です。こういうときにはまず「贈与」とは何でしょうという話から始めるのだと思うのですが、それに関して共有可能な定義をつくるのは難しいし、あまり意味がないかなと思っています。先日、動物行動学の大御所の先生が研究会でお話しされていたのですが、例えば言語というものに関しても文系や理系のいろいろな研究者が集

まって議論するときに、お互いに譲歩できる、譲り合ってここは共有できるという狭い定義をつくることで、その研究や学問の矮小化になってしまうし、現象がつまらないものになってしまったりするので、そういう定義みたいなものは取りあえずは置いておいて、まとめる段階で多少つくっていけばいいのではないかみたいなことをおっしゃっていました。「贈与」とは何ぞやということを考えるときにも、やはりいきなり狭い定義に持ち込むということは非常に良くないと思っています。

＃4

それも、本当に「贈与」はすごく難しい、そして面白い話です。これは私の手元にたまたまあった本なのですけれども、『おくりものはナンニモナイ』というものです。私が持っているのは原典ですが、日本語訳は谷川俊太郎がしています。ある家で飼われている犬が、自分よりももっとお金持ちのおうちに飼われている友達の犬にプレゼントをあげようというときに、彼は何でも持っているので何をあげていいか分からないということになって、最終的には箱に nothing（何もない、無）を詰めて渡して、中をのぞくと何もない、ただ僕と君の他にはね、ということで、ものはあげていないけれども、自分とあなたの関係がここにあるではないかというお話です。これもかなり極端な例かもしれませんが、私たちが贈り物や贈与に感じる本質みたいなものを端的に表しているのではないかと考えます。つまり、贈り物というのは、そのものが重要なこともあるのですが、ものだけが重要ではなくて、それを与えてもらうお互いの関係が大事だったり、そういう目に見えない nothing が贈られるということもあり得るのだという話です。

＃5

あるいは、私は日曜日に教会に行くのですけれども、行くと、教会なのでお金を寄付するときに全員でこれを唱えるのです。献金のお言葉みたいなもので、「私は贈り物を求めているのではありません。私が求めているのは、あなたがたの霊的な口座に加えられていく実なのです」ということを唱えながらお金を箱に入れる。これは新約聖書の言葉なのですが、別に神様が言っているわけではなくて、パウロが言っている言葉です。とはいえ、お金は贈っているわけです。なぜ「贈り物を求めているのではありません」とわざわざ言って、大事なのは霊的なものなのだということをいちいち宣言しながら渡さなければいけないのかなと思いながら、そこにいるわけです。つまり何が言いたいかというと、贈与とか贈り物というときに大事なのは、授受される物というわけではなくて、それに付随する何か、まさに霊的なものなど、そういうものなのかなと思います。また、そのようにいわれていると思います。

＃6

こういう話を私がするのも、もっと詳しい方がたくさんいらっしゃるのでお恥ずかしいの

ですが、贈与行為は経済的行為ではないし、政治的行為でもない、宗教的行為でもなくて、それらの全てであるということを、今村さんや、もちろんモースの『贈与論』などにも書いてあるかと思います。つまり、贈与というものが私たちの社会のありとあらゆるところに立ち現れてくるので、解釈しようと思えば、観察者の切り取り方、どの場面を切り取るかでさまざまな社会の一側面として解釈できるわけです。だからこそ面白いし、だからこそ捉えようがなくて難しい。いろいろな解釈ができるという問題もあると思います。特に人類では、こういう贈与や分配が社会と切り離せなくなるほど発達しているのだと思います。逆に言いますと、ヒト以外の霊長類では、そこまで社会と全く切り離せなくなるほどまでではないのではないかと私自身は感じています。

＃7

本日、この後、発表しますが、贈与に関する話はいきなりできないので、まずはヒト以外の霊長類における食物の分配の話を概説します。そしてオランウータンの食物分配の話になって、最後にオランウータンにおける贈与の可能性みたいなことを論じたいと思います。

＃8

これも狭い定義になってしまいますから、一端の作業的な定義だとお考えください。いわゆる霊長類研究における食物分配の定義は、所有者、この場合の食べ物の所有者は、食べ物に身体的に接触している場合を指す定義が一般的ですが、所有者により防衛可能な食物が、他個体へ無抵抗に移動すること（unresisted transfer of food）です。

こうした食物分配がなぜ関心を集めるかといいますと、幾つかあると思うのですが、一つは、動物行動学的に考えると、なぜ独り占め可能な資源であるところの食物を所有者が手放すのか。その適応的な理由、利他行動としての関心があると思います。もう一つは、人類の進化と結び付いた関心です。人間はやはり日常的に食べ物を分配していますし、直立二足歩行や大脳化との関連、そこに食物分配が果たした役割というような見方がもう一つの柱だと思います。

＃9

私はオランウータンの研究をずっとしてきているのでオランウータンの写真しかないですけれども、食物分配はこういう形で行われます。食べ物を持っている側が明確に抵抗していない場合、もちろん追い払われてしまうこともあるし、穏便に拒否されるみたいな感じのこともあるので、一概に全てが unresisted なわけではないですが、こういう感じで食物の分配は行われていきます。

＃10

これは、よく食物分配行動の進化モデルとして引用されるグラフを日本語に訳したものなのですが、幾つかの包含関係にあると考えられています。これはヒトを含む霊長類69種類のうち、食物の分配がどういう関係で行われるかということをモデル化したものです。69種類のうち、食物の分配が起こらない種も結構いるのですが、39種類では母子間の分配が見られるということが分かっています。

＃11

このときに説明しなければいけないのは、原猿はアフリカ、アジアに生息している、メガネザルや、小さいロリス、ガラゴなどのサルです。そして新世界ザル、旧世界ザルは、その名のとおり中南米に生息している新世界ザルと、アジア、アフリカに生息しているオナガザル上科を中心とした旧世界ザルのことを指しています。ここで新世界、旧世界と書いているのはそういうことです。類人猿はチンパンジー、ゴリラ、オランウータン、テナガザルを含みます。

＃10

大事なのは、母子間分配が行われる種のうちに母子ではない非血縁の成体間での分配が起こる種が含まれるということです。その逆ではないということです。つまり、非血縁のオトナ間での食べ物の分配が見られる種では、必ず親子間、母子間での食物分配が起こるということが分かっています。というわけで、まず食物分配行動の基盤になっているのは母子間の分配なのではないかと考えられています。

そこで問題になるのは、子どもがどういうものを食べられるかという問題です。採食が簡単なものは子どもが自分で採ればいいのですけれど、採食が難しい食べ物、食べるのに操作が必要なものは母親から分配を受けるという意味で、採食が難しい食べ物を食べるということが関係しているのではないかと考えられています。オトナ間での食物分配は、オス・メス間とオス・オス、メス・メスの同性間はあるのですが、これはパートナー選択みたいなものに関係しているのではないか。そして、人間にだけさらに広範囲に行われる食物分配があるといわれますが、それは相互依存関係みたいなもの、人間が生きていく上で生存がなかなか大変な環境があったのではないかということで、リスキーな採食ニッチが関係していのではないかといわれています。

＃12

非血縁個体間での食物分配の説明仮説が幾つかあるのですが、なぜ血縁のないオトナ間で食物を分配するのかというメカニズムに関しての説明仮説です。一つは、互恵的な交換仮説です。食べ物と食べ物以外のサービスの交換があるのではないかといわれています。食べ物

を分配すると相手からグルーミングのお返しをもらえるとか、食べ物をよく分配する相手は闘争のときに援助をしてくれる、オス・メス間で食べ物を分配すると交尾機会が得られるなど、幾つか説はあります。ただ、特に食物と交尾機会などは結構反論の論文や反論の研究などがありまして、それがどれくらい正しいかということはまだ議論が進んでいる段階です。

あるいは、野生のオランウータンでは、パートナー選択という意味で食物の分配を通してメスによるオスの評価がされているのではないかという仮説もあります。そういうパートナー選択や、食べ物が交尾に絡んで関係してくるみたいな話は、霊長類に限らず、右下に示したカワセミや、他の哺乳類以外の動物界でも求愛給仕みたいな行動は報告があります。ですので、別に霊長類だけに限らず、動物界の雌雄間の食物分配には繁殖が絡んでくるのではないかと考えられています。

＃ 13

これは、ヒトを含めた霊長類の食物分配、ただ単に食べ物が分配されるだけではなくて、そのパターンがどのようになっているかという割合を示したグラフです。これも勝手に和訳してしまいましたが、彼らが何を言いたいかというと、一番右がヒトの子どもです。右から三番目は類人猿の成体、その次は類人猿の子どもなのですが、真っ赤な部分は resisted という意味で、これは、抵抗して食べ物の分配が不成立であったという割合です。薄い赤（ピンク）は、所有者が抵抗するのに食べ物が強制的に移動したもので、これは食物分配に本来は当てはまるという例です。オレンジが passive で、所有者が一切反応せず食べ物を取っていくことを許す、許された盗みともいいますが、受動的に食物分配が成立した例です。黄色が reactive なので食べ物を要求する行動（ベギング）が見られて、それに対して所有者が積極的に分け与えたという分配です。緑の proactive は、ベギングなしに分配したという例です。これはヒトが一番多いですよ、ヒトでは積極的な分配の割合が高いですよということがいわれています。

＃ 14

私が研究しているオランウータンですが、アジアの大型類人猿で、基本的には群れずに暮らします。他個体との社会的な接触時間は全体の活動の時間の 2％ともいわれ、あまり他者と会わないのですが、行動圏が大きく重なり合う。つまり、近くにお互いに生活空間を持っているので、たまに出会ったり、連れだって遊動するということもあります。

＃ 15

そんなオランウータンの食物分配なのですが、一番メインに見られるのは、先ほども説明した母子間の食物分配です。これは食べるために処理が必要な食物を母親に対して子どもがねだる、それに対して母親は積極的に与えることはせずに、子どもが持っていくことを許容

するという形で行われます。

＃16
　映像をご覧ください。

＊＊＊動画上映開始＊＊＊

　これは野生のオランウータンですが、シロアリを食べている。シロアリを塚からほじくり出したり、子どもが取るのを許容するという形でシロアリを食べます。

＊＊＊動画上映終了＊＊＊

＃17
　子どもがシロアリを自力でなかなか手には入れられないので、こういった形でお母さんから分配を受けて食べ方を学んでいくのではないかと考えられています。
　私が食物分配を観察していた場所は全くの野生のオランウータンではなく、半分ぐらい野生で、半分ぐらい飼育下みたいな場所でした。ボルネオ島のセピロクというところにあるオランウータン・リハビリテーションセンターでした。

＃18
　こうやって森の中で生活しているオランウータンたちがいるのですが、これは全部、親がいない孤児で、保護されて森に放されたオランウータンだそうです。そのオランウータンたちに給餌は行われるのですが、右のようなフルーツや野菜みたいなものを1日2回配布するというか供給するという形で、ほぼ餌やりという感じで行われていました。

＃19
　基本的に自由に森の中で生活しているオランウータンなので、そういうオランウータンが集まってきたところに食べ物を渡すと、オランウータン同士で食物分配のやり取りが行われていくわけです。

＃20
　分配のネットワークを、すごく雑なのですが、簡単に描きました。紺と青がオスです。色が濃い方がオトナ、色が薄いものがワカモノ、まだ体が成熟しきっていない10歳前後のワカモノです。薄い赤というかピンクが若いメスで、濃いピンクがオトナのメスです。これは食べ物がどう移動したかなので、例えばMKというものが真ん中にいますけれど、オトナの

オスからメスに対して移動した、分配されましたよという見方をします。オスからメスに対して食べ物が移動したという形で見ます。

＃21

これは最初にリハビリテーションセンターの給餌台でオランウータンを観察しながら図を描いていったのですが、そこで見えてきたのは、いろいろな個体と関わりを持ち、分配するという個体と、一部の限られたオランウータンから分配を受けるという個体の違いです。特にオトナメスはオトナオスとだけしかやり取りをしないということです。その逆で、オトナオスは多くの個体から食べ物を得たり、逆に与えたりすることもありました。PG は最年少で食物分配以外でもみんなの近くにはいなかったのですけれども、他の個体と交渉を持たない個体がいたり、そういう非対称的な関係性が見えました。

＃22-23

特に際立って見えたのは、オトナのオスが関与することが非常に多いということです。写真をお見せしますが、オトナのオスで、周りが若い個体ばかりなので、体の大きなオスが体の大きさを生かして、珍しいジャックフルーツなどが与えられると、それを手中に納めて食べるわけですが、それに対して周りに集まってきたワカモノを追っ払うということはしません。若いオランウータンたちがねだってちょこちょこ取っていくというものは、基本的には許容していました。これに対して攻撃的に追い払うという場面は見たことはありませんでした。それがこのグラフにも現れていて、このグラフは何かというと、食物分配交渉を多く行った個体の丸をただ単に大きくしただけなのですけれども、やはり一番関与しているのがオトナのオスだったということです。オトナのオスは、食物分配を受ける側にもなるし、与える側にもよくなるという関係性が見られました。

＃24

こういう分配を見ている中では、野生のオランウータンと同じ傾向があったと感じました。頻度は、調査の仕方が違うので単純には比較できないのですが、野生のオランウータンは9000 時間観察して、食物分配交渉はたった 50 例程度しか観察できません。それよりは、給餌されているので頻度はもう少し高いのですが、そんなに食物分配がしょっちゅう行われるというわけではありませんでした。これは、元々オランウータンは単独性が強くて群れをつくらないので、野生下では社会交渉を持つ頻度が少ない、そもそも社会交渉を持たないことの方が多いので、こういう結果になっている。それは半野生下でもある程度は一致していました。

オトナオスの間では一切、食物分配は起こりませんでした。オランウータンのオス同士はすごく強い競合関係にあって、結構、敵対的に振る舞う傾向にあり、そもそも要求するとい

うことはありませんでした。逆にオトナのオランウータンの間で行われる食物分配は、基本的にはオス・メス間でのみ行われました。そのときにオスとメスの間では非対称的な関係が見られて、メスが食べ物を所有している場合はオスの要求を拒否するという割合が高く、逆にオスが所有者の場合はメスから求められると拒否する割合が低いという非対称性がありました。

これらのことは、これは野生のオランウータンの研究でいわれているのですが、オスにとっては、オス間の繁殖の競争が激しいので、メスに対して気前の良さのようなものを示しているのではないかという説と、メス側の立場からすると、オランウータンの場合は強制的にオスがメスを押さえつけて交尾するということがあって、メスは非常に強く抵抗しますので、相手となるオスが強制交尾を行う傾向があるのか、暴力的な傾向があるのかみたいなことを知るためなのか、オスを試している、テストしているのではないかという説、解釈もあります。

＃25

食物の分配をオランウータンがやるときに、のぞき込み行動が見られます。チンパンジー、ゴリラなど大型類人猿とヒトに特徴的な行動だと思います。

＃26

こののぞき込み行動というのは、特にワカモノが食物分配をねだる文脈でよく見られました。ワカモノの方がのぞき込みをよくして、その後に食物分配が起こるという形がよく見られました。

＃27

これはかなり初期に取ったデータなのですが、のぞき込みは面白いことに、給餌が行われてからある一定の時間がたつと増えるという現象があります。最初は食べ物がじゃんじゃん供給されるので、周りに食べ物が一瞬あふれるわけです。それをみんな手を伸ばして取っていくのですが、大体10分くらいすると職員が持ってきたかごの中の食べ物がなくなってしまうのです。それがなくなると、職員がまいた食べ物を取得することができなくなるわけです。それ以上、食べ物を取ろうとすると、誰かが持っているものにアプローチする必要が出てくるのです。そうすると、のぞき込みが増えるということが見られました。つまり、食物の供給が止まると分配のパターンが変わるということと、のぞき込みはもしかしたら所有みたいなものの在り方とも関わるのかと考えました。

＃28

まとめますと、オランウータンにおける食物分配は、最初のコドモ期には、お母さんとの

1対1の関係の中でシロアリや殻の硬い果実など子どもが独自には食べづらいものが分配され、そこからワカモノ期になると、さまざまな個体間で対多数とのやり取りが発展し、それがオトナになると、相手がかなりオトナの間では対異性みたいな形に限定されていくという形で発達していくのです。

＃29

食物分配の主な様式は、基本は「許された盗み」です。食物の所有者は他者の出方を待つ態度を取ります。分配の前にのぞき込みが多いところもオランウータン食物分配の特徴です。

これらは母子間の食物分配が基盤となり、ワカモノ期に対象が拡大され、やがてオトナの間で起こる分配へ結び付くと考えられます。同じようなことがヒトでは起きるのでしょうかということが気になります。

そして、物は交換されるかという問題ですが、今、分配が起きてその次に反対方向に分配が起こるみたいな即時の交換は見られません。ただし、それはどれぐらい時差があって時系列的に相互に分配されるみたいなことがあるのかは、まだよく分かりません。

食物分配の交渉にはオトナオスが関与することが多かったです。そして、オトナ間ではオスからメスへの分配が多いということは繁殖と緩やかに関係しているのかもしれません。緩やかにと書いたのは、ものすごく繁殖を有利に進める効果があるのだったら、もっと日常的にオスはメスに食べ物をどんどん分配してもいいのではないかと思いますが、食物分配の頻度自体は多くはないのです。ですので、関係しているとしても緩やかなものだろうと理解しています。

あとは、食物を独占可能、この場合はオトナのオスでしたけれども、力の強い優位者から弱い劣位なワカモノが分配を受けることができるというのも一つの特徴だと思います。これは黒田末壽さんが、ボノボの食物分配から優位者が我欲を断念して自制することや、劣位者の自制の否定ということをおっしゃっていますが、それに通じるものかと思います。つまり、優位者から劣位者に対する分配が起こるという意味では、ヒトと類人猿で共通しているかなと考えています。

＃30

食物分配は、やはり霊長類では自発的に行われないとよくいわれます。反対に、ヒトの食物分配や協力行動は自発的に行われるところが特徴で、そこがヒトとサルでは違うのだということがよくいわれます。

＃31

ですが、私がこうやって森の中で観察しているときに、給餌が終わった後に、みんなオランウータンたちは三方向に離れて遊んでいるのですが、10メートルほど離れた板根の陰で、

たくさんイモを抱えて独り占めして食べているオランウータンがいたのです。あからさまにたくさんのオランウータンがいるのと反対側の板根の陰で食べていたので、隠れているのかなと思って観察していたのですが、その食べている個体の目の前の藪から他のオランウータンがガサッと出てきて、その出てきたワカオスは、イモを抱えたワカメスの方にゆっくり近付いてくるのです。ゆっくり近付いてきたワカオスを見て、イモを抱えていたワカメスが一つイモをぱっと差し出し、近付いてきたワカオスに手渡して、残りの4個を抱えて少し移動して、また板根で採食を再開するという場面がありました。

＃32

これは行動要素のみを切り取ってみれば、明確なベギングがあったわけではない、つまり明確な要求があったわけではないのですが、ワカメスは自発的に食べ物を渡したといえます。だから、霊長類では珍しい自発的な食物分配に見えたわけです。ただ、文脈を考えると、給餌の後に板根の陰で採食していたメスの面前に突然現れた他者という文脈を切り取ってみれば、この直後に執拗なベギングが来るということを見越すことは多分難しくないと思うのです。そこで、一部を先渡しすることで、後に続くベギングを回避しようとしたのかなと私は解釈しました。

＃33

つまり、オランウータンも恐らく近い未来の他者の行動を予測して積極的な分配を行うということはするのかなと、そのときに思いました。こういう他者の欲求の先読み、見えないベギングみたいなものが、例えばヒトを贈与に駆り立てるときにも存在するのではないかと思います。例えば贈与というと、惜しみなく与えるというように感じますけれども、その裏には制度や、逸脱者への懲罰、あるいは、けちと言われること、つまり他者の評価への恐れみたいなものが、見えないベギングとして機能しているということも考えられるのではないかと思っています。それは恐らく、物質量的に言ってもオランウータンの3倍の脳容量がある人間では、他者心理の理解や交渉履歴の記憶、昔、彼からこういうことをしてもらった、逆にされたみたいなことを覚える能力は当然高いでしょうから、そういう見えないベギングの対象や期間や規模が拡大されるということはあり得るのかなと考えました。少なくとも、行動だけを見てその分配が自発的かどうかといったことを論じるのは、結構、難しいのではないかと思います。

＃34

最後のスライドです。かなり乱暴な議論もありますが、ヒトとサルの分配の連続性とギャップみたいなものを考えるときに、連続する部分、あげる・もらうという関係、所有者が本来独り占めできるものを持っていくことを許す・許されるという関係性は霊長類にもあ

る。そういった関係の中で「寛容な」個体が存在する。もしかしたら、これは他者の欲求の理解や所有者の自制という現象に結び付いているのかもしれません。また、最後に述べたように、他者の要求の先読みみたいなものもしているのだと思います。

反対に、ギャップについては、ここでは私は明確な断絶だとは思っていなくて、連続的にヒトで発展したものだと思っているのですが、やはりヒトの分配、贈与は非常に過剰な頻度で大規模に行われ、時には全然知らない人に対しても分配が行われたりするわけです。これは非常に特殊だと思います。ヒト以外の霊長ではあり得ないと思います。それはヒト系統の進化の過程で発展したものだと考えられます。

そして、過去の交渉履歴の記憶と、その呼び出しです。この人と過去に何があったか、何をされたか、逆に自分が何をしてあげたかという記憶は非常に重要です。

それと関連しますが、そういった他者の欲求、他者が考えていることの先読みをする。その先読みする範囲の広さ、先読み能力の高さみたいなものも恐らく効いてくるだろうと思います。これが、いわゆる人間の贈与を語る上でよくいわれる返礼の義務や負債、互酬性に当たるものの基盤になるのではないかと、非常に乱暴ですが考えています。

あるいは、見えない対象への分配も、霊長類ではなかなかなさそうに思いますので、これもヒトにおける連続的に発展したものなのかなと思います。以上です。

引用文献

Feistner, A. T., & McGrew, W. C. (1989). Food-sharing in primates: a critical review. Perspectives in primate biology, 3 (21–36).

Jaeggi, A. V., & Van Schaik, C. P. (2011). The evolution of food sharing in primates. Behavioral Ecology and Sociobiology, 65, 2125–2140.

岩田有史，田島知之「贈与以前―ヒト科類人猿の食物分配」(2016)（編）岸上伸啓「贈与論再考：人間はなぜ他者に与えるのか」．臨川書店.

（川添）　田島さん、ありがとうございました。時間が来ていますので、田島さんの発表に対しての質問やコメントは最後の総合討論のときにまとめてお寄せください。それでは、少し休憩を挟んで 14 時 20 分から次の徳山さんの発表を開始しますので、時間までにまた皆さんお越しください。よろしくお願いします。

―休憩―

（川添）　次は、京都大学の徳山さんより、ボノボの「暴力」についてご発表いただきます。よろしくお願いします。

発表２「『愛と平和』の類人猿ボノボにおける、集団間攻撃交渉パターンが示すオス間競合とメスの協力」

徳山　奈帆子
京都大学・霊長類研究所／野生動物研究センター

よろしくお願いします。
（以下、スライド併用）

＃1
今日は「ボノボの暴力」というお題を頂いたのですが、実はボノボは「暴力」がないことで知られている類人猿ですので、どうしようかなと思ったのですけれども、なぜボノボに「暴力」がないのかという視点でお話をしていきたいと思います。

私は田島さんがいた研究室に学部はいたのですけれども、修士課程からは霊長類研究所におりまして、霊長類研究所には人類学の方がいらっしゃらなかったので、他のお二人の発表者に比べると、多分、人類学の方と議論を深める機会は今まで非常に少なかったと思いますので、このような場に呼んでいただき、ありがとうございます。感謝しております。

＃2
では、早速「暴力」とはと考えたとき、このお題を頂いたときに、まず辞書を引いたのですが、まず「乱暴な力、無法な力」、そして「物理的な強制力を行使すること。特に、それにより身体的などに苦痛を与えること」という定義がありました。けれどもそれ以上に、ヒトだと「暴力」には身的なもの、殴る蹴るなど直接身体的に対して力を行使するものでもありますが、もう一つ、精神的なものもあるといわれています。「言葉の暴力」などといった、言葉により心を傷付けるものもヒトでは「暴力」として扱います。

＃3
霊長類では心理的攻撃もあるかもしれないのですけれども、それは私たちは霊長類にインタビューをするわけにもいきませんので、なかなか分からないので、「身体的接触を伴う攻撃」、または「殺し」を「暴力」と呼ぶ人が多いようです。私自身は、論文では「暴力（violence）」という言葉は引用以外では用いてなくて、基本的には severe aggression などと書いています。

「暴力」「殺し」についての研究は数多く行われています。例えば Gomez（2016 年）は、

1024 種の広い分類群の哺乳類において、同種殺しが見られるかどうかという分析を行い、そのうち 40％で同種殺しが、頻繁にでも、まれなことでも起こるということを見出しました。そして、こういう同種殺しが行われる種は、集団生活、ナワバリを持つ種に多いということが分かりました。霊長類は特に社会性が高くて、行動圏、ナワバリも持つような動物ですから、そういう意味もあるのだと思いますけれども、特に霊長類（赤く囲ったところ）において、非常に多くの種で同種殺しが見られるということが分かりました。

こういうところから、ヒトの「暴力」は進化的に深く根付いたものという考え方があります。特にこういう研究から出てくるニュースなどではセンセーショナルに人の「暴力」は進化的なもの、深く根付いたものだというようなタイトルが付けられることがよくあります。

＃4

また、ヒトの「暴力性」の進化ということでよく比べられるのがチンパンジーです。チンパンジーでは集団内でも、集団間でも殺しが見られ、またそういう殺しや激しい攻撃、「暴力」が彼ら自身の利益、繁殖戦略などに結び付いているということが知られています。そのようなことから、人間の集団内の殺しや戦争などの「暴力性」がそういうところから発生してきたのではないかというような考え方があります。

＃5

確かにチンパンジーには、「チンパンジーは暴力的だよね」と言いたくなるような行動があります。

＊＊＊動画上映開始＊＊＊

この映像は集団内のオス間の殺しの映像です。マハレで起こったアルファオス（1 位のオス）が、集団の他のオスにリンチを受けて殺されるという映像で、これは短くしているのですけれども YouTube に全て上がっているので、よければご覧ください。

＊＊＊動画上映終了＊＊＊

肉食動物のように喉元にかみついて一撃で殺すというのではなくて、チンパンジーはこうして多数の個体が協力して 1 個体を殴ったり蹴ったりしながらゆっくり殺していくというような殺し方が特徴です。

＃6

また、これは集団内のオスの殺しです。

＊＊＊動画上映＊＊＊

集団間でも非常に敵対的な交渉が起こり、激しい攻撃交渉や殺しが見られます。集団のオスたちが、パトロールと呼ばれるのですけれども、一緒になって隊列を組んで集団の端をパトロールしていって、他の集団の個体を見つけると襲い掛かって手ひどく攻撃するというような敵対的な出会いが見られます。

＃7

このようなチンパンジーでの「暴力」、殺しや激しい攻撃交渉をヒトにおける殺しの頻度や激しい攻撃と直接的に比較した研究があります。これは二つのカテゴリーに「暴力」を分けていて、身体的接触を伴う攻撃がチンパンジーとヒトでどれくらい起こるか、また、殺しの頻度がチンパンジーとヒトでどれだけ異なるかということを調べた研究です。

まず、身体的接触を伴う攻撃、殴る、蹴るということが起こる割合は、チンパンジーのオスで大体1時間に0.023回ぐらい、メスではもっと低くて1時間に0.009回くらいです。ヒトのアボリジニにおいてはそれがもっともっと低くて、男性では1時間に0.00006回、こちらはあまり男女で変わらなくて、女性は1時間に0.00005回くらいしか起こりません。しかし、殺しの頻度を見てみると、10万個体いた場合に、チンパンジーでは年に271個体くらい殺されるだろうという試算で、狩猟採集民では164人、しかし農耕民ではぐっと上がって595人です。これは採集民の中にもいろいろバリエーションがあって、農耕民の中にもいろいろなバリエーションがあります。

この結果からWrangham さんは、チンパンジーの殺しの頻度はヒトの地域や文化間のバリエーション範囲内に収まるくらい起こっている、しかし身体への攻撃の頻度はチンパンジーでずっと高いということを示しています。このように「暴力性」が直接比較された研究もあります。

＃8

チンパンジーにおける「暴力」は、主にオスで起こります。殺しのうち92％がオスによって行われるもので、殺されるのも、73％だったと思うのですが、オスが殺されることが多い。つまり、殺しはほぼオス・オスで起こるということです。メスもたまに殺しを行うのですが、メスが殺すのは基本的に子どもです。オトナ同士でメス同士が殺し合うということはありません。

集団内でも、集団間でも子どもを殺す子殺しが起こります。子殺しは1個体で行うことがあるのですけれども、オトナ同士の殺しが起こるときは、1個体対複数という極端な戦力差の下で起こります。つまり殺しを行うためにはオス同士の連合、協力して攻撃するという行動が必須ということになります。

また、オトナ同士の殺しのうち74％が集団間で起こります。74％はそこまでパーセンテージが高いわけではないのではないかと思うと思いますけれども、集団の出会いはめったに起こるものではありませんので、そのチャンスを考えると、殺しは集団間で集団内よりも起こりやすいということが分かってきています。

また、さまざまな研究により、こういう殺しや激しい攻撃といった「暴力」が、オスの繁殖戦略である、オスの繁殖効率に結び付いているということが分かってきています。

＃9

集団内では高順位の個体が多くの子どもを残せるのですけれども、それにはオス同士の順位争いが必要で、オスが連合してまた順を争い、そういうものがオスの繁殖効率に結び付いています。また、集団間においても、オスの連合によってオスの他集団における激しい攻撃交渉が隣接集団の競合力を低下させて、自分の集団の遊動域が拡張したり、メスの繁殖率が上がったりして、オスの繁殖効率に結び付いているということが分かってきました。

＃10

さて、こうやってチンパンジーのオスの繁殖効率に「暴力」が関わっている。つまり、そのことがヒトにおいても「暴力」は進化的に適応的で根深いものなのだといえるのでしょうか。

＃11−12

そういうときに、もう一つ、ボノボという種を考えていきたいと思います。ボノボはチンパンジーと同じく、ヒトと最も進化的に近い存在であります。基本的な生態や行動は似ています。チンパンジーと同様に父系集団を持ち、安定したメンバーシップを持ちます。主食は果実で樹上性が強いなどといった行動はよく似ているし、見て分かるように外見も非常によく似ています。

ただし、ボノボでは子殺しを含む殺しは全く見られません。今まで１例も直接観察されたものはありません。また、激しい攻撃にはほとんど至らず、激しい攻撃に至る前に宥和的な行動で攻撃を収めるということがよく見られます。

＃13

このようにオス同士では尻つけという行動がよく見られますし、マウンティングも見られます。またメス同士だと、ホカホカというのですけれども、メス同士が性器を擦り合わせて攻撃交渉を収めるというような行動がよく見られます。

＃14
　ただ、ボノボが完全に平和的かといえばそうではなくて、このような激しい攻撃行動もよく起こります。

＊＊＊動画上映開始＊＊＊

　このときは、確か６～７頭だったでしょうか、メスがオスを激しく攻撃している姿です。

＊＊＊動画上映終了＊＊＊

　チンパンジーと異なるのは、こういう激しい攻撃はメスの連合からオスへ行われるということです。このようなメスの連合が非常にボノボの社会に重要な意味を持っています。

＃15
　チンパンジーとボノボの社会の違いで一つ大きいのは、社会関係としてボノボはメス中心社会を持っているということです。チンパンジーはオスが優位で、社会関係もオス同士の仲が良くて、オスの連合が強いというようなオス中心社会を持ちますが、ボノボにおいては、集団内でメスが優位、メスの連合が強い、そしてオスにおいてはオスの連合、協力行動がほとんど見られないという特徴があります。殺しについても、チンパンジーではありますが、ボノボでは起こらない。集団間関係では、チンパンジーでは非常に敵対的なのですけれども、ボノボでは比較的平和な集団間関係を持っています。

＃16
　なぜチンパンジーでは殺しがあり、ボノボでは殺しがないのか、激しい攻撃が見られないのか。集団内でなぜ殺しが見られないのかということには、集団内のオスの繁殖戦略の違いが効いているのではないかということが、今までの研究でだんだん分かってきています。先ほど少しだけ説明したのですけれども、チンパンジーにおいては高順位のオスが集団内での繁殖において優位になります。オス同士は順位を争って激しく連合を組んで争う。その結果、高順位になった個体が繁殖に優位である。つまり、攻撃性の高い個体が優位になります。また、子どもやメスへの攻撃も自分の繁殖に有利になるということが分かっています。チンパンジーは５～６年に１度しか子どもを産まないのですけれども、そこでオスが子殺しで子どもを排除すると、そのメスが発情してオスと交尾できるというようになって、子殺しという行動が自分の繁殖に有利である。つまりこれについても、メスや子どもへの攻撃性の高い個体が集団内の繁殖に有利ということで、チンパンジーのオスの攻撃性が高まってきたと考えられています。

ボノボにおいては、高順位のオスが集団内繁殖に有利という点はチンパンジーと変わりません。むしろボノボの方が高順位のオスに集団内の繁殖成功が偏っているということが知られています。ただし、オス同士の激しい順位争いが見られないのです。その代わりに何が見られるかというと、母親のサポートが非常に重要であるということが分かってきています。強い母親、1位の母親の息子が高順位になります。そして、その息子が非常に高い繁殖成功を収める。たとえ低順位だったとしても、近くに母親がいればよく交尾ができるということが知られていて、ここに直接また母親のサポートが効いてきます。また、メスの mate choice も非常に集団内繁殖に効いているということが知られています。

また、チンパンジーのように子殺しをすれば自分の繁殖に有利かといわれれば、子どもへの攻撃をした場合は、メスの連合に非常に激しい攻撃で抵抗されるということが知られていて、ここでメスの連合に阻まれて子殺しができないというような状態です。このような中で、オスの攻撃性が上昇するような進化にはならなかったのではないかと考えられています。

＃ 17

集団間関係についても、チンパンジーの集団間関係はほぼ常に敵対的で「暴力」が起こるのですけれども、ボノボにおいては、集団ごとに行動圏があるものの、その行動圏は大きく重複しています。私がよく見ているのは赤で囲った PE 集団という集団ですが、その集団の行動圏は周辺部の PW 群、BI 群、E1 群と非常に大きく重複しています。他集団の声を聞くと、避けることもあるのですけれども、多くの場合、近付いて集団の出会いが起こります。集団が出会うと、数時間から数日にかけて共に過ごします。集団が出会うと、攻撃交渉も起こるのですけれども、毛づくろいや遊びや交尾など、集団で行われる行動のほとんどが異集団の個体同士でも生じます。

＃ 18

＊＊＊動画上映開始＊＊＊

例えばこの動画なのですけれども、これは2集団が一緒にいて採食を行っているところです。少し騒がしいことは騒がしいのですけれども、「2集団が混ざっているよ」と言われなければほとんど分からないような行動を見せます。

＊＊＊動画上映終了＊＊＊

＃ 19

また、左上は3集団の個体が混じり合って毛づくろいをしているところです。その下は違う集団のオス同士が毛づくろいをしているところです。オス同士も毛づくろいができる。こ

のような親和的な交渉がボノボでは可能です。また、右の縦の写真のオスと子どもは異なる集団に属する2個体です。ボノボでは集団間の殺しが起こらないので、子どもは他集団のオスを恐れずに、このように背中に乗ったりすることなどができます。

＃20
＊＊＊動画上映開始＊＊＊

また、先ほど田島さんの発表であったような食物配分も集団間で起こります。真ん中にいる個体と上にいる個体は異なる集団に属する個体です。どちらもメスなのですけれども、特に抵抗することなく、集団間で食物配分が起こります。

＊＊＊動画上映終了＊＊＊

＃21
ただ、「愛と平和」などと言われてしまうボノボなのですけれども、その集団間関係は本当に愛と平和かというようなことはあまり検討されてきませんでした。確かに集団間の子殺しを含む殺しは観察されてきていませんし、けがをするような行動もまれです。また、集団間の食物配分や毛づくろいなどの親和的な交渉も起こります。

ただし、ボノボの集団間、特にオス同士には若干、それなりの敵対関係や緊張関係があるだろうといわれていますし、果実の多い時期に集団の出会いが多いことが知られています。つまり、果実の少ない時期は競合が強すぎて出会うことができないのかもしれません。ですので、ある程度の繁殖や食物資源を巡る競合があることが予想されます。

また、集団間で交尾が起こるのですけれども、それよりずっと攻撃交渉の方が頻度が高く起こります。例えば私の観察の一時期を取り出してみると、2017年の6ヶ月間のデータを見てみると、578時間の観察で、集団間の交尾は59回見られましたが、集団間での攻撃交渉は206回見られました。つまり、「愛と平和」と聞くと、イメージではずっと毛づくろいをしていたり、交尾していたりするように聞こえるかと思うのですけれども、実際には攻撃している方が多いということです。

＃22
ただ、まだ集団間の競合関係がどのようなものなのかということは全く分かっていませんでした。チンパンジーではオスの他集団に対する攻撃性が繁殖効率の上昇に役立つということが知られていますが、ボノボではそのような情報がありません。ですので、ボノボでは集団間では競合がないから平和なのか、それとも競合が生じているけれども他のメカニズムで平和なのかということを調べるために、ルオー学術保護区ワンバにおいて、2011～2015年

までのデータなのですけれども、集団間の攻撃交渉を観察しました。

＃23

私が観察しているのは赤で囲ったところにいるPE群で、オスが6頭、メスが9頭、子どもが11頭という構成です。周りに3集団のボノボが生息しているのですが、その隣接群と、総観察時間1951時間のうち486時間、一緒にいました。23％くらいの時間を他集団と一緒に過ごしているわけです。

＃24

集団内の攻撃交渉と集団間の攻撃交渉を比べてみると、オスが関わる攻撃交渉では集団内の攻撃交渉よりも集団間の攻撃交渉の方が高い値が出ました。ただ、メス同士の攻撃交渉においては、集団内の攻撃交渉も集団間の攻撃交渉も非常に頻度が低くて、同じくらいでした。

また、集団間の攻撃交渉が集団内の攻撃交渉より「暴力的」かというと、そうともいえず、攻撃に身体接触を伴う割合は、集団内の攻撃交渉だと16.5％、集団間だと16.6％で、全く違わないという感じです。

また、けががあった攻撃は、集団内の攻撃交渉だと2回、これはメスからメスへの攻撃、メスからオスへの攻撃です。集団間の攻撃交渉だと3回見られたのですけれども、全てメスからメスへの攻撃でした。けがといってもそんなに大したことはなくて、写真のように、手に擦り傷が一つできるというようなけがです。

＃25

ただ、リンチ的な攻撃も見られました。これは2014年8月20日に見られた事例で、まず激しい叫び声と悲鳴を聞いて、「何だ、何だ」と私が行くと、私が見ているPE群の年を取ったメスのボクタという個体が地面でうずくまっていて、その周りにE1という他の集団のメスたちが10頭くらいいたのですが、そのメスたちが蹴ったり、殴ったりを繰り返していました。ボクタはうずくまって耐えていて、驚いたことに、メスは集団間を移籍するのですけれども、PE集団出身でE1集団に移籍した若いメスのパフィーまでもがボクタを蹴りつけていました。これが1分くらい続いて、E1のメスたちがボクタから離れて、私はもう、ボクタは死んだかなと思ったのですけれども、ボクタはすっと立ち上がって、何事もなかったように歩き去りました。

1時間以上たってから、ボクタが集団に合流したのですけれども、目に見えるけがなどはありませんでした。ですので、メスたちによるリンチ的攻撃は、見ている限りではとても激しく見えたのですけれども、実際には手加減されていたようです。面白いことに、このような攻撃ではオスは一切参加しません。周りにいて「怖えー」という感じで見ています。

＃26

ただし、そういう激しい攻撃をしないオスなのですけれども、異集団個体への攻撃行動自体においては、オスの方がメスよりもずっと高い頻度で行います。また、攻撃相手についても、オスからオスへの攻撃が非常に多いということが分かりました。メスからメスへの攻撃は赤で示されたところなのですけれども、ほとんどありませんでした。

また、全てのオスが他集団に対して攻撃的かというと、そうでもなくて、順位が高いオスほど他集団に対して攻撃的だということが分かりました。

＃27

また、他集団の存在が自集団の寛容性を高めるということが分かりました。左の図のように、自集団のみでいるときよりも他の集団と出会っている間の方が、集団内の個体同士の攻撃交渉が減りました。つまり、自集団への攻撃交渉を抑制していた、集団内での寛容性が上がったということが分かりました。ただ、これは他集団のオスの存在が大切だということが分かりました。右のグラフは、集団内に他集団のオスがいると集団間の攻撃交渉が増えて集団内の攻撃交渉が減るという図なのですけれども、このような関係はそこにいる他集団オスの数のみに影響されていて、他集団のメスがいても攻撃交渉の頻度とは相関がありませんでした。つまり、メスがいてもあまり関係なくて、他集団のオスの存在が攻撃交渉のパターンに影響するということが分かりました。

＃28

また、他集団個体を攻撃するときは、より連合を組む（協力する）ということが分かりました。つまり、2対1や2対2といった攻撃交渉が増えるということが分かりました。ただ、これについても性別との組み合わせによって変わってきています。メスは集団内でも連合を組むのですけれども、オスについては集団内ではほとんど連合を組みません。そういうオスが、集団内の攻撃交渉になると連合を一気に組むようになるということが分かりました。メスにおいても高まるのですが、オスにおいてそういう積極性がさらに高まります。つまり、他集団個体を攻撃するときに連合を組む積極性がメスよりもオスにおいて高まるということが分かりました。

＃29

ただし、オス同士が連合を組んだとしても、それがチンパンジーのような殺しにつながるかといえばそうでもなくて、つかみ合いをした後ににらみ合っていると他の個体が現れて、突進し合ったり、追いかけ合ったり、3対3などで行うけれども、それがけがにつながるような攻撃交渉になることはほとんどありませんでした。事例が細かいのであまり詳しく説明しませんが、突進する、逃げる、突進する、逃げるというようなことを自集団のオス同士で

支え合いながら行うという事例がよく見られました。

＃30

面白いのが、メスは他集団個体と協力することができるということです。これは誰と誰が協力したかというネットワークなのですけれども、2集団が合わさった形でネットワークを描いています。そうすると、協力関係が2集団できれいに分かれず、メス同士につながりがあるということが見えると思います。

＃31

こういう集団間のメス同士の協力は、自集団のオスと他集団のメスの攻撃交渉で、自集団のオスではなく他集団のメスをサポートした事例が最もよく見られました。例えば、PE集団のオスがPW集団のメスに対して突進したときに、PE集団のメスがその自集団のオスに対して突進・タックルをして一緒に殴りつけるというような事例や、PW集団のオスが攻撃的なディスプレイを行ったときに、PE集団のメスとPW集団のメスが一緒になって、攻撃的行動を行ったオスに突進していくというような事例が見られました。

＃32

結果をまとめますと、集団間のオス同士は競合関係にあり、メス同士は寛容関係にあるということが分かりました。集団レベルですと、他集団との出会いにより、集団内の協力行動や寛容性が上昇しました。ただし、「暴力的」攻撃、身体的接触を伴う攻撃の割合は、集団内の攻撃交渉でも集団間の攻撃交渉でも変わりませんでした。

ただし、オス同士の攻撃が非常に高い頻度で見られて、さらに集団内では見られないオス同士が協力して他集団オスを攻撃するという連合攻撃行動が見られました。

逆にメスにおいては、競合はほとんどなさそうだなという感じでした。集団間のメス間の攻撃交渉は非常に少なく、また、異なる集団のメス同士が協力することができます。激しい攻撃が起こるのはメス同士ですが、殺しに至るような攻撃は見られません。これは、恐らく豊富な食物環境が効いているのだろうという説があります。

＃33

ボノボでも、集団間のオス間に競合が見られました。チンパンジーのように、全てオス間連合での他集団への攻撃がオスの繁殖効率につながっているというところまでは見ることができないのですけれども、最低限、他集団へ攻撃するときに自集団への寛容性を高め、オスが協力してオス間の連合関係が見られるということが分かりました。つまり、集団間の攻撃パターンは、ボノボにおいても父系の構造やオスの繁殖戦略を反映したものだったということが分かりました。つまりオスの攻撃の激しさだけが穏やかになっているのでしょうか。

＃34

繰り返しになってしまうのですけれども、チンパンジーでは、集団内の繁殖戦略において攻撃性の高いオスが繁殖に有利だということが知られていますが、ボノボにおいては、オスによる攻撃性が必ずしも集団内の繁殖には結び付きません。このような集団内の繁殖戦略の違いが副産物的に集団間のオスの「暴力性」の抑制につながっているのかもしれません。

＃35

また、一つボノボで特徴的なのは、少し言い過ぎなのですけれども、「暴力的」で「支配的」な性がオスからメスに逆転しているということがいえると思います。チンパンジーにおいては、オスがメスよりも絶対的に優位な存在です。全てのオスがメスよりも高い順位を持ちます。それに比べてボノボにおいては、メスが連合してオスに対抗することによって、メスの順位がオスよりも高いとは必ずしもいえないのですけれども、集団の上位はメスが占めます。例えばオスで１番強い個体よりも、メスの１番強い個体の方が強いということが知られています。それにより、チンパンジーでは集団内でも集団間でもオスを中心に社会関係に参加するのですけれども、ボノボではメスが優位・中心社会で、オスの順位や繁殖成功は母親の力で決まるということから、集団内でも集団間でも恐らくメスが力を握っていると考えられます。このようにチンパンジーとボノボでは支配的な性の逆転が見られます。中心的な性と言った方がいいでしょうか。

＃36

そういうメスですけれども、血縁選択的に考えると、ボノボのメスは集団を移籍する性ですので、集団内のメスも集団間のメスも血縁関係的にはほとんど変わらないということになります。ですので、集団内も集団間も関係なく、協力パートナーが増えれば増えるだけ有利になると考えられます。そして協力パートナーが増えると、他集団のオスからの攻撃や子殺しの抑止になることが考えられます。また、これは一つ今、分析が終わって投稿準備中なのですけれども、集団が出会っている間、メスは自集団のメスよりも他集団のメスと積極的に毛づくろいをするということが分かってきていて、メスは集団外のメスと積極的に関係構築を行おうとしているということが分かってきました。

また、その他、集団の出会いによりメスが得るだろうメリットを考えると、例えば他集団オスとの交尾や関係構築により、他集団からの子殺しの防止になるかもしれませんし、若いメスが集団の出会いの際に入ってくることで、息子の繁殖機会が上昇するかもしれません。また、行動圏が重なっているところで良い採食場所がある場合は、そこを共同利用することができるというメリットがある可能性があります。

＃37

まとめますと、メス優位・メス中心なボノボ社会でも、集団間の攻撃パターンは父系の構造やオスの繁殖戦略を反映していました。ただ、オスの集団内の繁殖戦略でメスの介入によるオスの攻撃抑制が起こっており、その副産物的に集団間でもオスの攻撃性が抑制されている可能性があります。

また、メスにおいては集団間において寛容・協力的な関係がありました。また、集団内で優位かつ中止的な役割を果たすメスにとって、集団の出会いにメリットがあるだろうと考えられます。その結果、オスについては、そんなに集団同士で出会いたい、仲良くしたいと思っていなくても、オスの繁殖戦略を無視して平和・寛容な集団の出会いが起こっているのではないかと考えられます。

つまり、鍵となるのは恐らく集団関係を形作る中心的な役割の雌雄の違いではないかと考えています。

＃38-39

さて、「暴力」抑制の話になってきてしまっていたのですけれども、話を戻して、「暴力」は進化的に適応的か、ヒトに深く根付いたものなのかと考えていくと、進化的に非常に近縁なチンパンジーとボノボの2種でも、ここまで「暴力性」が異なります。今日はお話しできなかったのですけれども、チンパンジーにおいても地域において殺しの頻度などに非常に大きな違いがあります。つまり、「暴力」は非常に根深くて適応的なのだという考え方もあるのですけれども、どちらかといえば社会の形や環境によって、そういう「暴力」が適応的かどうかということは柔軟に変化し得るものだという方が、言い方としては良いのではないかと思いました。

＃40

すみません、とっ散らかってしまったのですけれども、ご清聴ありがとうございました。

（川添）　徳山さん、ありがとうございました。質問やコメントは最後の総合討論のときにお願いします。それでは、少し休憩を挟んで15時10分から最後の谷口さんの発表を行いますので、また時間までに皆さまお集まりください。よろしくお願いします。

―休憩**―**

（川添）　次が最後の発表になります。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の谷口さんより、ニホンザルの「子育て」についてご発表いただきます。よろしくお願いします。

発表３「野生ニホンザルの離乳期の子育て」

谷口　晴香
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所

はじめに

「ヒトを語るように、ニホンザルの「育児」を語る」というお題をいただきました。まず、「育児」という言葉を広辞苑（第七版）で調べてみました。「乳幼児を育てること」とあります。そもそもヒトとサルで年齢区分は共通しているのでしょうか？ 本発表では、ヒト特有の「育児」の特徴について紹介したのち、ニホンザルの「子育て」について語り、最後に、ヒトとサルの「育児」の相違点と共通点に関して年齢区分をあわせ検討することを目指します。

ヒトの育児の特徴について

ヒトの育児は、共同育児と子への積極的な食物供給というユニークな特徴が指摘されています[1, 2]。これらの特徴により、大型類人猿と比較し、ヒトは子を早く離乳させ、また子の死亡率を増加させず、短い出産間隔で子を産むことが可能となりました。ヒトの授乳終了は、非産業社会では平均 2.4 歳という報告があり[3]、乳歯が生え揃った頃に離乳します。一方で、ニホンザルや大型類人猿は、第一大臼歯の萌出前後に離乳が完了する傾向にあり、ヒトと比べると遅いです[2]。

個体の成長・成熟などの生涯のイベントの時間的な流れの有り様を生物学用語では、生活史と呼びます。種ごとにある程度決まっており、ヒト以外の霊長類では、主にアカンボウ期、コドモ期、ワカモノ期、オトナ期とよばれる段階があります。一方で、ヒトでは、アカンボウ期とコドモ期の間に、「チャイルド期」とよばれる特有の段階があり、「離乳しているが、年長の養育者に食物供給や保護を依存している時期」とされています[4]。ヒトにおいてチャイルド期が必要となったのは、大きな脳の発達と文化学習のためと考えられています[4]。このように、年齢区分がサルとヒトでは異なっており、ヒトがチャイルド期のころに、サルはまだ母乳に依存しているアカンボウ期です。

ニホンザルの子育ての地域間比較：青森県下北半島と鹿児島県屋久島の比較

さて、上記でおおまかにヒトの育児の特徴を紹介しましたが、ヒトの授乳期間には大きな幅があり、また育児方法にも地域差があることが指摘されています[1, 3, 5]。では、ニホンザルの「子育て」に地域差はあるのでしょうか？

マカカ属において、優劣スタイルにより子育ての様相が異なることが指摘されているた

め[6]、まず簡単にマカカ属の優劣スタイルについて紹介します。ニホンザルはマカカ属という分類群に属しています。マカカ属は、優劣スタイルの厳しさにより4段階に分けられ、社会関係は系統によりある程度決まっていると考えられています[6]。優劣スタイルの厳しい社会と比較し、ゆるやかな社会では、社会交渉において優位個体と劣位個体の間の行動上の差異が小さいことや血縁者間の連合の程度がゆるやかであることが指摘されています。また、優劣スタイルの厳しさにより、子育て方法が異なります。ニホンザルを含む、優劣スタイルの厳しい種では、母親がアカンボウを頻繁に回収するため、アカンボウが他個体と交渉をもつ機会が少ないです。一方で、優劣スタイルのゆるやかな種では、他個体がアカンボウと接触することに母親が許容的であり、アカンボウは母親以外のメスや子ザルと関わる機会が多いです[6]。

ニホンザルは優劣スタイルが最も厳しい種に分類されていますが、いくつかの地域（屋久島、小豆島、淡路島）では、優劣スタイルの「ゆるやかな」方向への変異が示唆されています[7]。本発表では、「他のニホンザル集団と比較し、優劣スタイルがゆるやかな社会（屋久島）の離乳期のアカンボウはより群れ他個体と関わるか？」という問いを検討します。

ここで、調査対象のニホンザルに関して簡単に紹介します。ニホンザルは日本列島の北は青森県下北半島から、南は鹿児島県屋久島まで広く分布しています。複数のオトナオスとオトナメスにその子どもからなる複雄複雌の群れを形成します。ニホンザルの群れは凝集性が高く、群れのメンバーはおおむね移動を共にします。オスは性成熟に達する前に、生まれた群れを移出する一方、メスは一生生まれた群れに留まります。群れは血縁関係により結ばれたメスが家系を継なぎ、世代を超え維持されていきます。メスの優劣関係は、おおよそ血縁に従ってきまり、上位の家系のメスすべてが、下位の家系のメスより優位な順位序列が成立しています。つまり、出身家系により群れ内のメスの社会的な順位は決まっています。

本研究では、青森県下北半島（以下、下北）と鹿児島県屋久島（以下、屋久島）において生後7～11ヶ月齢のアカンボウ4個体を対象に冬季に調査を行いました。アカンボウは春に生まれ、冬前の生後6ヶ月齢を過ぎる頃には、母親からもらえる母乳量が減少しますが、その一方でおおよそ乳歯が生え揃い、採食量が増加する時期でもあります[8–10]。観察対象のアカンボウを1時間単位で追跡し、3分ごとに対象のアカンボウの行動（毛づくろい、移動、採食、休息、運搬、その他）、乳首接触の有無、母子間距離、そしてアカンボウの2メートル以内にいる個体の性年齢とその行動を記録しました。各個体40時間ずつ観察しました。

ニホンザルの母親が子に対して行う主な子育て行動は、1）授乳、2）運搬、3）毛づくろい、4）抱く、5）他個体との敵対的交渉を行う子への支援があり[11]、本発表では、1）～4）について地域間比較を行いました。4）抱くに関しては、さるだんごについて検討しました。さるだんごとは、サルが互いに接触し休息することで形成されるサルの塊りのことで、体温保持の機能があり、また他個体への寛容さの指標ともなります[7, 12]。また、ニホンザルでは、手渡しによる食物分配は母親でさえごく稀であり、離乳期のアカンボウは、自力で食物を探

索・入手・処理する必要があります。その際に、「誰かと食べる」ことは、食物に関する知識が少ないアカンボウにとって、食物を見つける上で重要です[13]。そのため、今回は特に母親と離れた際のアカンボウの採食時の2メートル以内の近接相手（以下、共食相手）に関しても検討しました。

調査の結果、母親の乳首への接触時間割合は下北と比較し屋久島は短い有意傾向にありました。母親を含む他個体からの運搬と毛づくろいに関しては地域間に有意な差はみられませんでした。一方で、毛づくろい相手やさるだんご形成相手における性年齢の多様さは、下北より屋久島の方が高かったです。次に共食相手についてですが、母親と5メートルを超えて離れた際のアカンボウの共食相手は、他の年齢と比較すると、両地域共に同世代のアカンボウと共食する割合が高かったです。下北と比較し屋久島のアカンボウは母親との分離時間がより長く、また採食時における同世代のアカンボウとの共食時間割合がより大きかったです。結果をまとめますと、母親を含む他個体による総子育て時間割合に有意な地域差はみられませんでしたが、下北と比較し屋久島では、多様な性年齢の個体が子育てに参加し、またアカンボウは母親から離れ同世代同士で共食する時間がより長く、「群れのメンバーに見守られながら、子どもの中で子を育てる」子育て様式が示唆されました。

子育ての地域差には、生態的な環境と社会環境が影響を与えることが考えられます。下北と比較し、屋久島のアカンボウは母親との分離時間が長かったです。冬季の気温を比較すると、屋久島は下北より10度ほど高いです。気温が高くなるほど、母親との接触を保とうとするアカンボウの行動が減少することが報告されています[12]。また、冬季の食物条件は、常緑樹林帯の方が落葉樹林帯よりもよく[14]、そのため常緑樹林帯の屋久島の方が、落葉樹林帯の下北より食物条件がよいと考えられます。下北と比較し、気温が高く、かつ食物条件のよい屋久島のアカンボウは体温保持や栄養の面で母親に依存する必要性が低く、母親からより離れやすい状況にあったのかもしれません。気温や食物条件のような生息的な環境が母親からの離れやすさに影響を与えた可能性があります。

また、下北と比較し、屋久島では多様な個体が子育て行動に関与しており、社会環境が地域間で異なっていることが示唆されました。屋久島では、優劣スタイルの「ゆるやかな」方向への変異が報告されており、末子優位がみられないとの指摘もあります[7]。末子優位とは、母親の援助により姉妹間の順位は若い個体（妹）のほうが年上の個体（姉）より上となることです[6]。ニホンザルでは生後1年以内に母親の順位が子におおよそ継承されます[15]。屋久島では上記で述べたように、離乳期において母子の分離時間が長いため、母親から援助される機会が少なくなり順位形成が「ゆるやか」となった可能性があります。これにより屋久島では、順位差のある個体間が共同しやすい社会環境を形成したのかもしれません。ただし、下北と比較し、「共同育児」傾向にある屋久島の方が、アカンボウの死亡率が高く、出産率は低かったです。母親以外の他個体が関わる子育て様式がヒトで報告されているような子の生存率の上昇や出産間隔の短縮を招いていませんでした。今後、育児行動の内容や繁殖パラ

メーターに個体密度が与える影響なども含め検討していきたいです。

サルとヒトの育児：乳歯列完成から永久歯の萌出まで

最後に、ヒトのチャイルド期（乳歯列完成から永久歯の萌出まで；2－7歳）とニホンザルのアカンボウ期（乳歯列完成から永久歯萌出まで；今回は調査対象の7－11ヶ月齢）における特に食事場面での「育児」に関し、相違点と共通点を検討しました。

ニホンザルのアカンボウは、母親と分離後、同世代のアカンボウや1－3歳のコドモと共食していました。母親と比較し、アカンボウは入手や処理の容易な食物を利用する[16]ため、ときに母親との共食が難しい場面があります。そのため、類似した食物を好む他のアカンボウやコドモと共に食物を探索しつつ共食することは彼らの生存において重要であると考えられます。

一方で、ヒトでは調理により食が社会に開かれていることが指摘されています[17]。例えば、焼畑農耕民ベンバの社会（母系の親族集団）においては、調理加工の共同による女性の集まりが常態し、子どもは、村内（13世帯100人程度）のどの家でも食事が可能です[17]。調理により、同じ場で、大人も子どもも共食可能な点は上述したニホンザルの共食の様相とは異なります。一方、ベンバの社会ではチャイルド期（2－7歳）の子どもは他の子どもとよく共に過ごし、子ども集団でまた食物の確保・調理・分かち合いを行っているという報告もあります[17]。また、南部アフリカ・サンの研究における狩猟採集民の育児の特徴として、授乳期を終えた子は多年齢からなる子ども集団に愛着の対象を移すことも知られています[5, 18]。乳歯列完成から永久歯の萌出までの年代の子を、「子どもたちの中で育てる」という行為は、サルと同様にヒト（農耕民や狩猟採集民）においてもみられることがわかりました。この子どもの中での育児は、ヒトやサルの母親に他の作業（採食、狩猟や採集、離乳前の子の育児）への集中を可能とさせるでしょう。ただし、この育児方法は非血縁者も含めた共同体のメンバー同士の共同での見守りが重要となります。ヒトとサルの共同育児の進化を考える際に、乳歯列完成から永久歯の萌出までの期間における「子どもの集まり」については今後も着目していきたいです。

引用文献

1. Kramer KL. Children's help and the pace of reproduction: cooperative breeding in humans. *Evolutionary Anthropology: Issues, News, and Reviews: Issues, News, and Reviews*, 14: 224–237, 2005.
2. Humphrey LT. Weaning behaviour in human evolution. *Seminars in Cell & Developmental Biology*, 21: 453–461, 2010.
3. Sellen DW. Comparison of infant feeding patterns reported for nonindustrial populations with current recommendations. *The Journal of Nutrition*, 131: 2707–2715, 2001.
4. Bogin B. Evolutionary hypotheses for human childhood. *American Journal of Physical Anthropology*, 104: 63–89, 1997.
5. Konner MJ. "Maternal care, infant behavior and development among the !Kung" *Kalahari Hunter-Gatherers: Studies*

of The !Kung San and Their Neighbors. Lee RB., DeVore I. (Eds.) Harvard University Press, pp. 218–245, 1976.
6. Thierry B. “Covariation of conflict management patterns across macaque species” *Natural Conflict Resolution.* Aureli F., de Waal FBM. (Eds.) University of California Press, pp. 106–128, 2000.
7. Nakagawa N. “Intraspecific differences in social structure of the Japanese macaques: A revival of lost legacy by updated knowledge and perspective” *The Japanese Macaques.* Nakagawa N., Nakamichi M., Suguira H. (Eds.) Springer Japan, pp. 271–290, 2010.
8. Tanaka I. Three phases of lactation in free-ranging Japanese macaques. *Animal Behaviour*, 44: 129–139, 1992.
9. Smith HB., Crummett TL., Brandt KL. Ages of eruption of primate teeth: a compendium for aging individuals and comparing life histories. *American Journal of Physical Anthropology*, 37: 177–231, 1994.
10. Iwamoto T. Food and nutritional condition of free ranging Japanese monkeys on Koshima Islet during winter. *Primates*, 23: 153-170, 1982.
11. 中道正之，山田一憲，大塚典子，今川真治，安田純，志澤康弘「勝山ニホンザル集団での出産観察と母親行動に関する事例報告」『霊長類研究』20：31–43，2004 年.
12. Schino G., Troisi A. Mother-infant conflict over behavioral thermoregulation in Japanese macaques. *Behavioral Ecology and Sociobiology*, 43: 81–86, 1998.
13. Rapaport LG., Brown GR. Social influences on foraging behavior in young nonhuman primates: learning what, where, and how to eat. *Evolutionary Anthropology: Issues, News, and Reviews*, 17: 189–201, 2008.
14. Nakagawa N., Iwamoto T., Yokota N., Soumah AG. “lnter-regional and inter-seasonal variations of food quality in Japanese macaques: constraints of digestive volume and feeding time” *Evolution and Ecology of Macaque Societies.* Fa JE., Lindburg DG. (Eds.) Cambridge University Press, pp. 207–234, 1996.
15. 鈴木久代，松浦永子，川道武男「子ザルの行動発達における性別、母の家系と出産経験の影響」『哺乳類科学』24：1–30，1984 年.
16. Taniguchi H. How the physical properties of food influence its selection by infant Japanese macaques inhabiting a snow-covered area. *American Journal of Primatology*, 77: 285–295, 2015.
17. 杉山祐子「ヒト的な様相としての調理加工の共同と生存―食が社会にひらかれるとき」『極限―人類社会の進化』河合香吏（編）京都大学学術出版会，479–503 頁，2020 年.
18. Draper P. “Social and economic constraints on child life among the !Kung” *Kalahari Hunter-Gatherers: Studies of The !Kung San and Their Neighbors.* Lee RB., DeVore I. (Eds.) Harvard University Press, pp. 199–217, 1976.

（川添）　谷口さん、ありがとうございました。以上、霊長類学の立場から三つの発表をいただきましたが、次のセッションでは人類学の立場からそれぞれの発表に対してコメントをいただきたいと思います。16：00 から次のセッションを開始しますので、お集まりください。

―休憩**―**

（川添）　それでは時間になりましたので再開したいと思います。このセッションでは、先ほどまでの発表に対して人類学の視点からコメントを頂きたいと思います。本日は三名の人類学者にコメントをお願いしています。三名のコメントを頂いた後に、各発表者からそれを受けたリプライを頂きたいと思います。それではまず、東京大学の田辺さんからコメントを頂きたいと思います。田辺さん、よろしくお願いします。

Ⅳ　コメントと発表者からのリプライ

コメント１

田辺　明生
東京大学

どうぞよろしくお願いいたします。チャットでレジュメをお送りしましたので、それをご覧ください。

まず、ヒトを見るというのがどういうことなのかですけれども、人文学においてヒトを見て語るときには、やはりヒトの意識についての認識が欠かせないと思います。ヒトを単なるアルゴリズムの結果としては描かないわけです。ヒトというのは感覚と知覚の組み合わせから成る意識を有し、さらにその自らの意識についてのメタ意識の層が多重的に存在します。ヒトはその意識の中で矛盾や葛藤、そして多層性を含む内面世界を有するものとして見て語ることができますし、人文学、特に文学などにおいて、そのような人間の精神世界というものが描かれてきたわけです。

対して、社会科学、自然科学の語りにおいては、ヒトをアルゴリズムによって説明できるものとしようとします。例えば社会生物学のように「より多くの遺伝子を残す」というアルゴリズムによって動いている、あるいは、政治学・経済学のように「自己の権益を最大化する」というアルゴリズムで動くものとしてアクターを描くということです。ただ、人文学においても、昨今の意識研究や脳研究の発達によって、ヒトが前意識的なアルゴリズム――現在情動（affect）論が盛んですけれども――、これによって動かされているところの大きさが明らかになってきておりますので、人間の自由な意志や精神をあまりに強調する極端も避けられるようになっています。ですから、自己意識に基づく自由というものを尊重しようとする極もありながら、アルゴリズムによる決定という極もあります。この二つの極の間で今、人間の理解が揺れているという現状があるのだと認識しております。

さて、類人猿研究の方ですが、欧米の類人猿研究は、科学的であろうとして、社会生物学や行動学的な説明をすることが多いと思います。対して日本のサル学は「擬人主義」が批判されることもありましたが、サルの主体性に着目した豊かな叙述を可能にしたとポジティブに評価することも可能だと思います。つまり日本のサル学は、単に「字数と時間の節約のため、そして話を面白くするため」に擬人主義とみなされる描写があったのではないのではないかということです。『ニホンザルメスの社会的発達と社会関係』の中で、森梅代さんと宮

藤さんが、私のレジュメに書いたようなことを書いています。つまり擬人主義というものは、量的に表現することの難しいサルたちの質的な行動を理解していく上で重要なことなのではないかということです。これは、日本のサル学において明らかにありましたし、私自身はポジティブに捉え直すべき伝統なのではないかと思います。もちろん、だからといってサルを人間と全く同様の意識ある存在者として扱うような擬人主義は、科学的に駄目なわけです。ただし逆の極端として、サルは意識やクオリアを有さず、一定のアルゴリズムに従うのみの存在者であると考えることも、また問題です。つまり人間においても、自由な意志対アルゴリズムによる決定論の〈あいだ〉において考えているのと同じく、サルにおいてもやはり、意識ある存在、そしてアルゴリズムの〈あいだ〉で考えるということが重要なのではないかということです。

一つ例えば、困ることと悩むことという、事前準備の竹ノ下さんと谷口さんの間での面白い議論がありましたので少し取り上げたいと思います。「困る」とは何か。自らの欲することと現実とのずれの中で、意図を達成しようとするが、それがうまく行かないことについての認識が「困る」だといえましょう。では、「悩む」とは何か。自らの意識における葛藤状態についての認識に伴う迷いの、さらに認識といっていいでしょう。こう考えるなら、竹ノ下さんは、悩むということはないのではないかとおっしゃったけれども、サルもある程度悩むこともあるのかなと思いました。例えば食物を渡すべきかどうか、赤ん坊とどのくらい離れて採食するかなどについてです。この辺は、どのように考えていらっしゃるのか、ぜひ聞いてみたいです。ただし、竹ノ内さんが指摘されたように、いつ離乳しようかなどという過去の後悔や未来の心配というような時間軸を伴う深い悩みは、確かになさそうです。このあたりも、今日のお話はヒトとサルの連続性と違いということが一つのテーマだと思うのですけれども、かなり連続的と違いというものを考えることができるのではないかと思いました。つまりサル（特に類人猿）には高度な自己意識の働きがあって、人間とそれは連続的なのだと。ただし、もちろん質的な違いや「深みや幅」の差異は当然あって、サル（それぞれの種）固有の意識の在り方と社会構造および生物学的なアルゴリズムとの関係を明らかにしていくというのが、これからの広義の人類学における課題ではないかと思います。ヒトでもサルでも、主体性（意識構造）、社会性（社会構造）、そして生物学的基盤さらには生態環境のあいだの関係性を総体的に描いていくということが、今、求められているのであって、この課題において類人猿研究と人類学は共通しているのではないかということを全体として思いました。

一つ一つのコメントに移っていきます。まず、田島さんのオランウータンの贈与です。これは非常に面白かったです。田島さんは贈与の定義に悩んでいらっしゃいましたが、取りあえず「自らが所有するものを他者に譲ること」と定義しておけば、まあ共通といっていいのではないでしょうか。このような定義をしたときに、やはり贈与者・分配者の主体性が措定されているということになります。これは重要なことなのだと思うのです。これまで霊長類

学は、より科学的に食物移転、単なる food transfer というのですけれども、それは主体性あるいは意識経験を軽視したもの言いになりますので、贈与というものを強調させた方がいいのではないかと考えます。unresisted transfer of food という言い方を田島さんは紹介してくれましたけれども、これだと最後に田島さんが出された積極的に贈与したような事例が入らなくなってしまいます。それも問題だと思いました。ただ、ヒトの贈与には極めて複雑な意図、戦略、意味があります。それに対して、オランウータンや他のサルにどこまでこうした贈与の複雑さや深さが認められるかということは、特にやはり主体性や意識の問題に着目しながら考えていかなくてはいけないだろうと思いました。

二番目。オランウータンにおける、母子間の分配、ワカモノ期に分配を拡大し、オトナの間の分配に至るというのは、ヒトの発達過程と似ていると思いました。ただし人間の場合は単に分配が拡大していくというものにとどまらず、やはり質的な問題、コドモ期とワカモノ期において適切な贈与とは何なのかについて学習する過程が重要であると思います。では、これはサルにないのかというと、今日のお話はやはり種によって違うだけではなくて、地域、社会によって贈与、育児の文化というものがあるのだという話なのだと思います。そうすると、贈与の文化や学習というのも、ある程度あるのではないかとも思います。これはぜひお聞きしたいです。

三番目に、オランウータンで食物が「交換」されるのかということです。共時的な交換は見られないということですが、これは交換ではなくて、やはり「贈与」なのだと思います。交換は市場に結び付いていくようなものでありまして、贈与はそれとは違う系譜だと私は考えています。関係性をつくるものが贈与です。ヒトの贈与は、まさに共時的に行ってはいけないということがポイントです。鉛筆をもらってすぐ鉛筆を返してしまったら、もう贈与にならないわけです。むしろ、違うものを別の時間に返すということが重要です。ここにおいて、時間軸における贈与の意図や戦略を巡る深みや広がりというものが人間においては生じます。オランウータンの贈与に反対贈与があるのかということについて、ややあいまいであるという研究結果だということですけれども、逆にいうと、贈与に対して何が渡されるかについて深みや広がりの存在の可能性を示唆していると考えることもできないでしょうか。単に食物贈与に対して「交尾機会の拡大」や「グルーミング」という１対１の交換関係がないとすると、もっと別の「優位性の確保・確認」など、さまざまな贈与と反対贈与の可能性を含みながら、つまり、より大きな潜在的可能性を持った行為としてオランウータンの贈与もあると考えていくと、これは人間の贈与に極めて近くなってくるわけです。そうすると、モースが言ったように、人間の贈与だけではなく、オランウータンの贈与についても「全体的社会事象」として考えられます。

つまり贈与というものは、単にアルゴリズムによって決まった、何か食物を与えて交尾機会を得るみたいなものではなく、贈与の多義性や多面性というものが認められたり、あるいは、より総合的な全体的な関係性の構築のために、いわば賭けとして一種行われるようなも

のです。こういう要素がオランウータンの贈与にも認められるかもしれないという意味で非常に面白いと思いました。

時間が足りませんので少し飛ばしながら行きますけれども、田島さんがおっしゃるとおり、優位者の自制ということは人間と非常に近いと思いました。

最後に、見えないベギングについての自発性と受動性ですが、非常に興味深いです。ここは、自発なのか受動なのかというより、応答的というようなことを考えたらいいのではないかと思います。人間でも、自発なのか受動なのかというより、やはり応答的、相互作用的なわけです。そのように考えると、ヒトとサルもまさに連続性があるのではないかと思いました。ですから田島さんがおっしゃるとおり、連続的発展ということ、贈与の連続性ということについては非常に大賛成で、言うならば意識や主体性の側面、あるいは贈与の多義性の側面を、より広げてみたらどうだろうということを思った次第です。

徳山さんの「暴力」の問題ですが、これも非常に面白かったです。徳山さんは、「暴力」と攻撃ということをおっしゃっていて、攻撃と「暴力」の違いは何かというと、やはり「暴力」は人間において他者の人格否定行為だということなのだと思います。では、人格を否定するというのは何かというと、その人の「そのひと性」を否定することです。その人の「そのひと性」、人格を否定することとは何なのかというと、それは社会関係性の中で決まっていくということになっていくと思います。ヒトから範囲をより広げるならば、その存在者の存在主体性（ある存在者がその存在者たろうとすること。コナトゥス）を否定する行為を「暴力」といっていいだろうと思います。サルもある程度、他者の意識や主体性を推測する能力があるのではないかと考えられるわけです。例えば贈与で、これを欲しがるだろう、ベギングするだろうと推測する能力もあるとすれば、サルの暴力というものを質的に理解するためには、その範囲を身体的接触を伴う攻撃や殺しに限定せずに、大声を出す、ジェスチャーで威嚇するなどなど、その人がその人として自分を保持しようとする行動を否定することというように考えられます。そうすると、「サルの心理は分かりません」と徳山さんは言っているのですが、そのようなことはないのではないでしょうか。やはりサルにも内面があるのだと考えると、やはり暴力についても心理と身体を連続的に考えたらいいのではないかということを考えました。

それから徳山さんは、「チンパンジーの『暴力』はオスの繁殖戦略であるということが分かっている」と言うわけなのですが、これは、いわばアルゴリズムによる説明です。だけれども、もし、チンパンジーというものを、意識・経験主体として捉えるならば、やはりこれでは暴力の全ては分からないですし、もちろんチンパンジーのオスがこうした戦略を意識的に展開しているわけでは恐らくないでしょう。人間の暴力については明らかに、もちろん繁殖戦略で説明できる部分もあるでしょうが、やはり意識について語ることなしに暴力という経験について論じることはできないわけです。このことは、チンパンジーにおいてもある程度いえるのではないかということです。やはり、チンパンジーの感情や意図などの主体性と

いうものを何とか知ろうとすると、「インタビューはできない」という言葉がありましたけれども、別の方法で論じられるのではないかと思います。例えば脳の意識の働きの構造を見るなど、いろいろなやり方が今、人間の意識研究についても行われているのをサルにも適用できるのではないかということを考えます。それから、チンパンジーとボノボの暴力の違いについては、これがメインで、非常に見事に説明されたと思います。チンパンジーとボノボは非常に生物学的には近いのですけれども、その類人猿にもこういう差異があるということは、さらに社会構造や関係性との関係で、主体性の違いなどということも語れるのではないかと思いました。

ところが徳山さんはこれを繁殖戦略に基づくボノボポリティクスというわけなのです。これはもちろん非常に興味深い立論です。ただ、これはやはり生殖機会の最大化というアルゴリズムによって攻撃行動の有無を説明するものでして、霊長類学としてはもう極めて立派で科学的で素晴らしい、けれどもサルを意識ある主体として捉える広義の人類学としては、やや物足りないところもあると思いました。これは趣味や方向性などもありますので、どちらがいい・悪いではないのですけれども、人類学者としてはそう思いました。

四番目です。社会の形や環境により暴力が適応的かどうか柔軟に変化し得るという指摘はとても重要です。ただしこれは個体の生殖戦略という観点からの説明です。種や集団の存続にとってどのような社会の形がより進化的に適応的なのかというのは、また少し別の問いとしてあるのではないかと思います。集団の存続にとっては個体の多様性が進化的に意義を有するようになりますし、それによって集団の多様性も出てくるという話になってくると思います。このときに、個々の個体がどうしてある行動を取ったのかというふうに考えていきますと、やはり個体の固有の主体性の問いに入らざるを得ませんし、そこから発展してきた社会構造、次の屋久島と下北の違いなどを考えるにおいても、やはり個体の主体性とその多様性ということを考えざるを得ないなと思います。

谷口さんのニホンザル、これも非常に面白かったです。やはりサルと人間が違うのは、コドモ期において教育をするということです。教育の重要な部分は、一時的な欲望をコントロールして社会的に適切な振る舞いができるようにすることだと思います。社会的に適切な振る舞いというのは、単に決まった社会規範に従うだけではなく、文脈に応じてその具体的な関係性の中で、enpathy を基礎として相手のニーズや欲望に配慮した行動をすることで、これが人間社会の倫理の基礎となっていると考えます。では、これがサルでどのくらいあるのかということです。

コドモ期に谷口さんが指摘されたのは、やはり保護関係や社会関係に文化的な差異があるということなのです。これは非常に面白いです。こうした社会構造に差異があり、それに応じた適切な行動というものがあるのならば、やはりそれはコドモ期に学習、教育があると考えていいのではないか。つまりそれは社会的な主体性構築をする過程というものが、サルにおいても見られるというふうに、考えてもいいのではないかということです。では、そこに

empathy がどのくらいあるのかうんぬんということはきちんとデータをそろえて見なくてはいけませんが、何かそうした連続性というものも見られるだろうということです。

それから三番目、屋久島のニホンザルで面白いのは、やはり個体間の相互応答・相互交渉の余地がより大きいように見受けられることです。だとすると、それぞれの集団によって文化が違うというだけではなく、さらに間主体性、相手がどう出るかを見ながら、相互交渉をしながら、アカンボウとどう接するかを決めていくという上で、人間について言ったような、相手を見ながら自分の行動を変化させていくという、いわば倫理の基盤みたいなものも見られるかもしれません。

四番目ですが、共同育児の屋久島の方がアカンボウの死亡率が高くて出産率が低いというのは、とても個人的には残念という勝手な思い入れをしました。ここは生息環境への適応の結果という説明と、それだけではなくて、やはりボトルネック効果があるのだということが説明としてありました。共同育児は、やはり進化的に適合的だとはいえないのでしょうか。ただ単にたまたま残ったようなものだと考えていらっしゃるのか、このあたりをもう少し教えていただければと思います。

それから、ヒトの社会との比較のところも非常に重要だと思いました。ヒトの社会でも確かに、いわば生存に優しい生態環境ではルースな社会関係があり、そして社会できっちりと対応しなければ生きていけないような厳しい生態環境では割合と社会構造がしっかりしているという大まかな対応関係はあると思います。サル社会、特にアフリカの類人猿をなさっている方は、やはりアフリカ社会との比較をするのですが、特に社会構造がきっちりとしているようなサル社会と比較するためには、例えば中国やインドや日本などの社会構造がしっかりしている社会との比較もやって、より総合的にヒトの社会における優劣関係、社会構造のしっかり度と、そうでないところの生態環境も含めて比較研究をするべきかなということを思いました。

いずれにせよ、生物学的基盤と生態環境、それから社会性、そして今日一番申し上げたのがサルの主体性や意識構造の問題です、この三つを総合的にやっていくというのが、これからの霊長類学や広義の人類学の課題ではないかということを改めて思いました。少し長くなりましたが、以上です。

（川添）　田辺さん、ありがとうございました。三つの大きいテーマに対してコメントを頂く時間が短くて申し訳ないです。続いて、立教大学の中川さん、お願いいたします。

コメント２

中川　理
立教大学

ご紹介にあずかりました立教大学の中川と申します。田辺先生のものすごく周到に準備された重厚なコメントの後で、非常に軽いものになってしまうのですけれども、私はフランスをフィールドとして経済人類学的な調査をしてきました。贈与であるとか市場の交換というものを主にこれまで研究してきたということになります。そのことからお分かりのとおり、霊長類学やサルの研究に対して近い人類学者の方もここにはかなりいらっしゃると思うのですけれども、私は非常に遠い文化人類学をやってきたのではないかと思います。ですので、すごく遠い視点から、少し突拍子もないというか間抜けなことを言うのが役割だと思いますので、そういう気持ちで付き合っていただければと思います。

今回のシンポジウムのタイトルは「ヒトを見るようにサルを見る」ということだったわけですけれども、私はこのお三人の発表を聞くときに、私自身が実際に出てくるサルを経済人類学者として、まるでヒトであるかのように見てみようと考えて聞いてみました。そうするとやはり、こういうふうに行動しているのだ、では、こういうことを知りたいというところがいろいろと出てくるわけです。そこからいろいろな疑問が出てきて、人間だったらこのようなことを調べて、ここがどうなっているかということを理解していくだろうなということがあるわけです。最初に竹ノ下先生が、人間対サルではなくてサルの個別性が非常に大事だと言ったと思うのですけれども、まさにそのとおりで、それぞれのサルにおいてその問題がどのように解決されているのか、あるいはどのように扱うことができるのかということを考えたいと思います。ですので、随分乱暴な話になってしまうと思うのですけれども、しばらくお付き合いいただければと思います。

最初の田島さんのお話の中で、大まかな分け方として、ヒトの分配はプロアクティブ、積極的で自発的であるのに対して、サルの分配は、まず要求されて、それに応えるものだという分け方を最初にされていたと思います。しかし、経済人類学的な見地からというか私の見方からいいますと、直接的文脈、つまりその場面において何か求められていなければ自発的なのかというと、人間においてはそういうこともないだろうということです。つまり簡単にいうと、以前に何かもらったからお返しをしているということであれば、その場でのぞき込まれて「くれよ、くれよ」と言われているから返すというのが非自発的で受動的な分配ということになるのに対して、その場で「くれよ、くれよ」と言われていなくても、前にもらったから返さないといけないということになると自発的とも言い切れないわけです。ですので、経済人類学は、まさに贈与の問題について考えるときに、自発的に見えるのだけれども実は

義務的な部分があるという、この二律背反というか両面性を問題にしてきたと思います。これはモースのころからずっと問題であったと思います。ですので、当然、実際にある贈与が行われているときに、それがどのような文脈で行われているのかということが気になるわけです。その場でどういうことが行われているかではなくて、その交換がどういうフレームの中で見られているのか、どういう枠組みの中で見られているか、あるいはどういう物語の中で見られているかということに非常に興味が出てくるわけです。

そのときに、人間であれば当然最初に、どのようにその交換を語るのかということを聞くわけです。「これはお返しなのですか、それとも第一の贈与なのですか、単にあげたいからあげているのですか、何かしてもらいたいからあげているのですか」ということを聞くということになります。それで、ある程度のことは分かるわけです。しかし、それでは十分ではありません。もちろん人間と人間との間のやり取りは、数多くのインタラクションが行われていて、記憶も十分でありませんし、きちんと全部想起することもできないわけです。そうしたら、次に何を見るかといいますと、どういう道具立てがつくられていて、その一つの分配がどういう枠組みで見られているかということです。このような手順で考えることが、今の経済人類学では多いと思います。

例えば分かりやすい例でいいますと、帳簿を付けるということです。例えば労働交換の帳簿で、まず一回やったら一回やってもらうということが行われているとしたら、帳簿を見たら、私はやりました、それに対してやってもらったということがきちんと記録として残っていれば、これはもうフレームとしてはっきりするわけです。やってあげたことに対して、返礼であるというフレームワークの中で、この労働交換が行われているということが見えてくるわけです。

あるいは、もっと儀礼的な枠組みというものもあり得ると思います。例えば普段、日常的な文脈から仕事の文脈を切り離すということです。例えば二人の知り合いがいるとします。友達の間で、私がもう一人のお友達に貸してあげます。そして、その貸してあげていた友達がコンビニでバイトをしているとします。コンビニに行ったら彼が働いていて、制服を着て普通にバイトをしています。そのときに私が買いにいって、商品を取って持っていって、「この間おまえに貸してあげていたから、これは払わんでええよな」とはならないわけです。つまり、彼がこのコンビニにいるということ、そして制服を着て働いているというサインがあって、その場合は日常的文脈の延長ではないということです。プロフェッショナルな文脈で彼はいるのですから、普段の枠組みとは違う枠組みでこの交換を捉えなさいよということが見えてくるということになります。

ですので、単に語るということではなくて、そういうさまざまな儀礼的なサイン、それは身体的なものであったり、衣装であったり、その場所であったりという、複合的な、いろいろな物質的な装置ということもできるかと思いますけれども、そういうものがあって、それによってフレームがはっきりする。それが返礼なのか、それとも即時的な交換なのか、それ

とも第一の贈与なのかというような文脈が見えてくる。いろいろな語りを聞いたり、その場面でどういう道具が使われているのかをいろいろ調べたりする中で、その交換のフレーム、文脈を何とかして明らかにしていくというのが経済人類学的なアプローチなのだと思います。

それでも面白いのは、そのようにフレームを決めて、これはこういう枠組みの中での交換ですよということは、やはり一義的には決定できないわけです。常に誤解があってずれていて、こちらは貸しているつもりでも、向こうも貸しているつもりだったり、そういう誤解が常にあって、それでコンフリクトが起こったりするということがあって、それが面白いところではあるわけです。常にフレーミングをしようとするのですけれども、そこからあふれ出していくなどという言い方をしますけれども、あふれ出していく部分があります。それがまた新たな交換を生み出していく。そういう構造を見ていくのが、人類学における交換やもののやり取りについての研究で最初に気になる、やろうとすることなわけです。

では、こういう目線で一つ目のオランウータンの話を見たときに、何が気になるか。もちろんオランウータンはしゃべることはできませんけれども、言語による説明がなくても、何らかのサインを通して、この分配するということをフレーミングすることができるのかできないのか、しているのかしていないのかというようなことが、やはり知りたいわけです。言い換えれば、オランウータンが食料を分配するということを、どういうフレームの中で見ているのか。これは、人間には意識・主体性があるけれども動物には主体性がないという二分的な分け方ではなくて、言語がなくても、はっきりと説明できなくても、何らかの物語化というか、何らかの文脈化みたいなものがあり得るのではないかという気がするわけです。そこがどのように文脈化されているのかということ、さまざまなサルにおいてできるのかできないのか、しているのかしていないのか、しているとすればどのようにしているのかというところが、やはり経済人類学的、文化人類学的な視点から見ると気になるわけです。

先ほどの田辺先生のコメントでもありましたけれども、オランウータンの時間差交換があるのかないのか。そこは少しはっきりしないというようなお話だったと思いますけれども、例えば二人の個体が時間を置いて、こちらからこちらに分配した、その後しばらく置いて逆の方向に分配があったというときに、それは何らかのサインを通して、1回目の贈与に対する反対贈与として2個目の分配が行われているのかどうなのかということを知るすべはあるのだろうか。あるとすれば、どのようにやっているのか。それとも、もう単に時間から切り離されていて、1回的な分配があって、2回目の分配が逆方向にありましたという感じで、オランウータンはぶつ切りの時間を生きているような存在なのか。そういったところをどのように考えればいいのか。そのときに、どのようなことを調べていけばそれが見て取れるのかということを考えていくことで、徐々に人類学的なアプローチと霊長類学的なアプローチはつながる部分もあるのではないかという気がしました。

あるいは、交尾機会の増大のために与えるというときに、それは先ほどの田辺先生の言い

方でいうと、アルゴリズム的にそうなのか。しかし、やはりそうではないような気もするのです。だとすると、交尾機会のために与えるということは、何らかのサインを通して、何らかの印を通して、やはり伝えられなければならないわけです。それがどういう形で行われるのかなみたいなことが非常に知りたい、気になるのですが、それをオランウータンに関して、そもそも知ることができないと考えていらっしゃるのか、それとも何らかの形でやはり理解する可能性があると思っていらっしゃるのかというところを教えていただきたいと思いました。

今の話は田島さんについてのお話ですけれども、残りのお二人に関しても、僕の知りたいことは全く同じことになります。ですので、少し時間分配的に短くなってしまうのですけれども、お二人についても触れたいと思います。

徳山さんの発表について。暴力に関しても、やはり同じようにフレームの問題があるわけです。つまり、東アフリカの事例でも、恒常的な戦争状態みたいなイメージがありますけれども、それは、ただ暴力を振るっているわけではなくて、やはり借りを返しにいく。相手に暴力を振るわれて、こちらは命を失ったのだ、だからお返しをしにいくのだという、ある種の贈与の裏側みたいな考え方がやはりあるわけです。これはどの事例なのか僕は確実に思い出せないのですけれども、アマゾンでも集団間の暴力は、一人、向こうから命を奪われたからそれのお返しにいく、そしてまた向こうがお返ししてくるというような繰り返しなわけです。普通に死んだ人も、相手からの霊的な攻撃、呪術的な攻撃によって殺されたというような理解があると、やはりそれのお返しとして戦争にいくという形でやり取りがされていきます。ですので、暴力も単にその場の一発きりの発動ではなく、どういうフレームの中で行われるのかということが、人間に関しては理解の上で非常に重要になってきます。そのときに、ボノボのケースでは、集団間の攻撃はどのように文脈化され得るのか、文脈を持ったものとして理解し得るのか。それともやはり全く理解されていなくて、1回きりの衝突の繰り返しのようなものとして認識されているのか。そういうことを知るためには、広義のサルの研究においてどういう手掛かりがあるのかということを、やはり知りたいと思いました。

谷口さんのケースも同じような感じなのですけれども、ごく短くお話ししたいと思います。最後にヒトにおける養育者同士の共同での見守り、血縁を越えた協力があるという話でしたけれども、やはりそれも、相手にしてもらったからしてあげる、してあげたからしてもらうみたいな緩いシェアリングの文脈の中で行われているのではないかと思います。だとすると、今度はニホンザルのケースにおいては、単に生態的なバランスの中でそういうものが、ある種、機械的に生じているというように認識せざるを得ないのか、それとも何らかのそういうやり取りの文脈みたいなものを明らかにする手掛かりを、サル、彼ら彼女たち自身が持っているのかどうか。あるいは、そういうことについて知ることがそもそもできるのかどうか。お三人に関しては全く同じ質問になるのですけれども、そういうことがやはり知りたいと感じた次第です。

つまり、ものや身体を利用した物語化あるいはフレーミングが、それぞれのサルの種類において、どの程度起こっているのか、起こり得るのかということが、やはり僕の中ではすごく気になるということです。田島さんは連続性ということでお話をされていましたけれども、連続的なものとして捉えたときに、それぞれのサルにおいて何が起こっているのかをどのように考えることができるのかを知りたいと思うのです。例えばカワセミに関しては、カワセミが給餌行動をすることで、交尾する機会を増やすというときには、多分あまり気にならないことだと思うのです。ですので、やはりサルだからこそ考えたいと思う部分であると思います。その点について教えていただきたいというか、具体的な質問ではなくて、少し漠然とした話になってしまいますけれども、私はそういうところについて知りたいと、お三人の発表を聞いて非常に強く思いました。以上です。

（川添）　中川さん、ありがとうございました。最後に岡山大学の松村さんからコメントを頂きたいと思います。よろしくお願いします。

コメント３

松村　圭一郎
岡山大学

松村と申します。今、中川さんがコメントをされて、私も経済人類学を勉強してきたこともあって、重なる部分もあるのですけれども、一応、私なりの言葉でコメントをしたいと思います。

最初に、竹ノ下さんからかなり挑発的というか、具体的な「これを論じる」というテーマが提示されたこともあり、今回の三つの発表をそういう視点で見ればいいのだなと気を付けながら発表を聞かせていただきました。最初に問題として取り上げられたように、擬人主義を批判するという点です。私は、田辺さんもおっしゃっていたように、擬人主義だったら全部駄目というように単純に切り捨てられるものではないと感じました。つまり、擬人主義が駄目だというときに持ち出された表現として、きちんとサルそのものを語る、サルそのものを理解するという言葉があったと思うのですけれども、ありのままのサル、サルそのものの行動みたいなものを理解するという前提に立ったときに、それは何か人間の言語や文化、視点、観察の外側に、すごく中立的で客観的な自然というものが存在すると想定しているように聞こえるわけです。

これは、マルチスピーシーズ人類学についての言及もありましたが、そういう最近の人類学の中で常に批判されてきたことです。純粋に客観的な自然が唯一あるのだという前提自体がおかしいのではないかということです。ですから、客観的に記述できるものを、人間とは切り離されたところにまず措定すること自体が、いいのか悪いのか、どのように可能なのかが問題になると思います。

そこで例えば、強姦という言葉を使うと意味が付く、だから強制交尾だと例に挙げられていました。これは、かなり単純化して分かりやすい例を挙げられたと思うのですけれども、例えばここでいう強制という言葉を使えば、何か単一の客観的な意味になるのかというと、もちろんそうではないはずです。強制性とは一体どういうことなのかということは、先ほど中川さんがおっしゃったように、見た目では自発的だけれども、義理などいろいろな関係の中でやむを得ず義務として行為するということもある。強制という言葉を使えば、純粋である、客観的であるとは限らない。あるいは交尾という行為も、例えばボノボの性器接触みたいなものを交尾の範疇に入れるのか、いや、あれは違う、交尾とは別のものだとするのか、それも状況依存的であると思います。中川さんがおっしゃったように、フレームをどう見るか、文脈をどう見るかが、やはり人類学にとって大事なので、そこで文脈を抜きに言葉の意味が客観的に定義されるという前提自体が、人類学の視点からは批判され得るものです。

だから、ある交尾が強姦になるのか友愛の印になるのかは文脈に依存するので、この言葉そのもの、例えば、辞書にこう書いてあるからというだけで、その言葉がこういう意味だというようには定まらない。常に文脈との関係の中で意味が定まってくるということです。

例えば戦争という言葉を使うと人間的に見えるという話もあったのですが、中川さんも言及されたように、東アフリカの牧畜民、ちょうど佐川徹さんのダサネッチの発表を私も中川さんも先日聞いたばかりなのですが、その牧畜民同士の戦いを近代国民国家の戦争と同じ戦争という言葉で語っていいのかということ自体が、かなり難しいわけです。ですから、人間が使っている言語の中でも、戦争という用語には非常に文化的な差異や文脈的な差異が関わってきますので、ある単語、ある用語を使えば客観的になるという話では全然ないだろうということが、まず一つです。

もう一つ、ご発表を聞きながら少し気になったのは、例えば田島さんの例で、オランウータンが、野生種と餌をあげて育てられている集団で分配の数が全く違うという話がありました。そういうことを考えても、既に人間がサル、霊長類の環境の一部になっている、つまり人間が観察する、観測する、数を数えるという行為自体が、もう純粋なサルそのものだけが独立して生きている世界ではないわけです。例えば実験室でアイちゃんなどチンパンジーにディスプレイで何か実験すること自体も、もうそれは客観的な行為というよりも、そういう装置を組み立てる人間の技術や観測の目線、それがこういうものだと理解するフレームワークに、もう入り込んでいるわけです。だから、人間と霊長類が切り離されて存在しているとは、やはり捉えにくいだろうということがあります。

もう一つ、ご発表の中でもときどき出てくるのですが、先ほどの強制という言葉もそうですし、オランウータンの所有者という言葉もそうですし、繁殖戦略という言葉もそうで、例えば戦略というのは非常に擬人的な言葉だと思うのですけれども、ある種、客観的な用語として使われたりもするわけです。だから、客観的な記述のように見えて、人間の言葉を使うわけですから、意味が状況によって非常に変わったり、ある種の含意がもう含まれている言葉が紛れ込んでしまうことには注意しなければいけないかなと思いました。

それぞれの個々の発表について、簡単にコメントしたいと思います。

まず田島さんの発表です。これも中川さんがおっしゃったのと同じようなことを考えたのですけれども、人類学者は文脈を見るわけです。だから、それが贈与なのか分配なのかを最初から定義できない、つまり、ある行為とかモノが移動することは、結果的に何が起こったかということを通して事後的にしか意味付けられないわけです。私が例として思い浮かべたのは、映画『万引き家族』の中で、駄菓子屋で少年が万引きをするわけです。そして、うまく盗んだと思って出ようとしたら、「兄ちゃん、もうやるなよ、妹を巻き込むなよ」みたいな感じで、その駄菓子屋のおっちゃんは、見て見ぬ振りをしていたと気づく。これは、一見行為だけを見ると万引きなのだけれども、おっちゃんは気づいていたということになると、これはおっちゃんからその少年への贈与とも捉え得るわけです。だから、結局モノがこちら

からあちらに移動しているなど、その行為だけでそれが贈与なのか分配なのかは定まらない。それは中川さんがおっしゃったように、自発性という言葉もそうです。ですので、これは先ほどの話とつながってくるわけですが、強制という言葉を使うだけで、何かそれが擬人化を逃れるという話ではないわけです。

同じように徳山さんのご発表の中にも、例えば攻撃回数をカウントすることが出てきます。このときに、何を攻撃とみなしてカウントするかというところに、やはり人間の認識枠組みが入り込む余地が大いにあるわけです。映像を幾つか、短いフリップだったので見ると、明らかに私たちも、何か日常的ではない異常なことが起きているように見えるのですけれども、ああいうふうに、まさに文脈がよく分からないまま行為だけを見せられると、それが何を意味しているのかが私たちはよく分からない。だから、ぱっと見、何か異常なことや、できれば避けたい何か暴力的なこと、嫌なことが起きているという感覚を覚えるのですけれども、まさにああいう切り取りをすること自体の中に、霊長類が何をやっているのか、その意味をつかみ損なう可能性があると思ったのです。

私が想像したのは、例えば人間集団を観察するときに、ある社会に入って、「ここの人たちはこうやって夫婦で乱闘して夫婦げんかをしています」という映像を撮って、いかに暴力的な集団なのかみたいなことを言ってしまう。それはやはり、その社会において暴力がどういう位置づけなのか、どういう夫婦関係、男女関係があるから、ここでの暴力がどういう意味を持つのかといった文脈を抜きには語れないのだと思います。

印象的だったのは、ボノボのメスが集団を超えて協力するというご指摘です。これは非常に面白いと思いました。それはなぜかというと、ボノボにとっての集団の意味とチンパンジーにとっての集団の意味は、果たして同じなのだろうかと疑問に思ったわけです。つまり、チンパンジーとボノボを比較するときに、チンパンジーでは集団内暴力がこれだけで、集団間暴力はこうだ、ボノボでは集団内暴力と集団間暴力はどうだという比較があったのですが、そこで比較されている集団という社会というか小さな集まりの意味自体がボノボとチンパンジーでずれているとしたら、果たして集団内と集団間を等価なものとして、チンパンジーとボノボを比べることができるのだろうかという疑問です。

もう一つは、オスとメスの関係もだいぶ違うわけですから、オスがメスに暴力を振るうことと、メスがオスに暴力を振るうことが、チンパンジーの中で意味を持つことと、ボノボ社会の中で意味を持って、それが暴力として描けるものなのかということも、もしかしたら違うかもしれないと思いました。それを、集団内の繁殖戦略が違うという形の説明が妥当かもしれないとおっしゃったのですけれども、もし集団という概念がボノボとチンパンジーでずれているとしたら、その意味が簡単にいえなくなる気もしました。

もう一つ、繁殖戦略という言葉、これは田辺さんがアルゴリズム的な理解とおっしゃったのですけれども、ここにもある種の語られない前提、子孫が多ければ多いほどいいという前提があります。これは後でまた谷口さんのところで少し触れたいと思います。繁殖戦略とい

う言葉の背後に語られない前提があるのではないかということです。つまり、徳山さんの事例では暴力を位置づけるときに、そもそもチンパンジーとボノボの中で暴力がどういうものなのかという位置づけが違うかもしれないという印象を受けました。

谷口さんのご発表も非常に面白かったのですけれども、最初に特に頻度、回数、時間を数量的に把握するという、まさに客観的にデータを取るという点についてです。それはある種サルそのものを観察し、あるがままを描いているようにも見えるのですけれども、実はあの前半の数量的な比較では、よく分からないというのが第一の印象でした。何となく分かったのは、後半で事例を説明していただいたときです。1日、どのようにサルのアカンボウが生活していて、他のコドモたちと関係を持ちながら過ごしているかという説明があったときに、まさにそれはヒトがどう過ごすかを見るような感じで観察されたと思うのですけれども、非常に分かりやすく、やっと理解可能になりました。もちろん、その中には擬人化の表現が入り込んでしまうわけです。例えば、この食べ物は食べにくいとか、手に入りやすいとか、休息というのも、ある行為を休息と名付けていいのかどうか分からないところもあるかもしれないし、この集団には入れてもらいやすいといったことなどです。しかし、それによって非常に、数を単純に比較しただけでは分からない文脈の中での行為の意味が分かりやすくなりました。だから、コドモが屋久島において集団を形成している点など、下北半島と屋久島の子育ての違いが非常に明確になった印象を持ちました。

屋久島は共同育児型だというのも面白いと思ったのですけれども、これもある種の共同育児という言い方自体、私たちがその言葉でイメージするのは人間の世界です。ある種の理解可能な言葉に置き換えられているわけです。ただ、その共同育児をしている屋久島で死亡率が高くて出産率が低いということを、田辺さんは残念だとおっしゃいましたが、私は、繁殖戦略という言葉が、単に子孫を多く残せばいいという前提に立つと、失敗というか、なぜそうなっているのだろうと思うかもしれませんけれども、環境との関係を要因として考えれば、必ずしも子孫を多く残すことがその集団の生存確率を高めるわけではありません。限られた自然環境の中では、むしろ頭数を抑制する方が生存戦略的にはいいかもしれません。ですからそこも、繁殖戦略というときの戦略そのものが、状況によって、環境によって違うということがあるのではないかと思いました。

全体を通して少し疑問に思ったのは、一つは種の位置づけです。チンパンジーはこうであって、オランウータンはこうで、ボノボはこうだと、種というものを、ある種固定した枠組みで語ることは、比較の枠組みとして当然視されていると思うのです。ただ、進化を考えたときに、それは分化していったわけですから、むしろその行動の違いや社会構造の差異そのものが種の分化をつくり出してきた。だから同じニホンザルでも当然、下北半島と屋久島で違いがでてくる。今も現在進行形で、ある種のコミュニケーション様式や、男女の集団のつくり方、オスとメスの関係の差異自体がむしろ種を分化させていったと捉えると、種を固定した比較の枠組みとして捉えるのとは違う見方ができるのか、できないのか。それは全く

間違っているということでしたらぜひ教えていただきたいのですけれども、種が固定していて、それで何が違うかという、その比較の仕方には、種というものをあまりに固定的に捉えすぎているのかなという点を少し疑問に思いました。

いずれにしても、全体を通して、三つの発表がなさっていたのは、やはり比較ということだと思います。文化人類学にとっても比較は研究のときに欠かせない視点です。つまり、あるがままを理解する、サルのそのままを理解するときに、サルだけを見て、あるいはボノボだけを見て、その行動の意味や社会構造の特徴を私たちは理解できるのだろうかということです。擬人主義が批判されるときは、ヒトとの差分としてサルを理解しようとしていることが問題だという指摘があったのですが、ではボノボを理解するときに、チンパンジーとの差分として理解することには問題はないのかということです。私たちはいずれにしても何らかの比較をすることによってしか、その現象の意味を理解し得ない部分があるのではないか。そう言い切っていいかどうか分からないのですが、例えば、回数を数える。多い・少ない、1日に何回攻撃したという回数が出ましたけれども、それが何を意味するかは、チンパンジーとボノボを比較して初めて多い・少ないがいえるわけです。つまり、比較なしに意味は定まらないということは、最初に申し上げたように文脈なしに行為や物事の意味が定まらないということと同じです。つまり擬人主義というのは、ヒトとの比較によって、物事を理解するための理解の一形態、客観的に理解しているような霊長類学においても恐らくずっと取り入れられてきた理解の一形態、一つのバリエーションなのではないかと思いました。すみません、長くなりました。

発表者からのリプライ

（川添）　松村さん、ありがとうございました。以上、三名の方からのコメントを受けて、発表者から少し返答を頂きたいと思います。全てに答えるのは大変だと思いますので、幾つか具体的な指摘もあったかと思うので、答えられるところだけでも答えていただきたいと思います。発表順どおり、田島さんからでよろしいでしょうか。

（田島）　5分話してもいいのか、それとも細切れで一つずつ言った方がいいですか。

（川添）　一つずつは答えられないと思いますので、大きいコメントや具体的なコメントに対して、幾つか答えられることがあればお願いします。

（田島）　ありがとうございました。早速ですが、皆さんからすごくポジティブなコメントを頂いてすごく感動しております。最初の田辺さんの、ヒトの贈与と同じようにサルの分配にも主体性というものを措定するべきなのではないか、主体性や意識みたいなものを軽視せずにきちんと考えるべきなのではないかというご指摘は、まさにそのとおりだと思って聞いていました。

これを言うと結構、話がそちらに行ってしまうのですけれども、私はオランウータンに贈与をされたことがあります。それはリハビリテーションセンターでのことでしたが、僕の後をついてきた若いメスのオランウータンが、バナナを僕に差し出してきたことがあったのです。それを受け取るのですけれども、オランウータンからもらったものを食べたら少しまずいかなと思って、返すのです。返すと、彼女は受け取るのですけれども、それをまた渡してくる。もらうのだけれども、はいはいといって返す。それを何度か繰り返した後に、そのオランウータンは私の長靴にそのバナナを突っ込んで去っていくということがありました。その相互行為の中で、実際オランウータンの分配を見ていても、惜しみみたいなものが見られたり、のぞき込みというもの、1対1の相互行為で目線をそらしてみたり、しぶしぶっぽくあげてみたり、実は結構いろいろ、中にはまさに文脈みたいなものがあるのです。

ですので、実は一つ一つそうやって文脈を見ていくことは可能です。ですが、やはり言語がないということで、インタビューできない、聞くことができないという点で、あのときの反対贈与なのかなみたいなことは、なかなかどう判断していいのかが結構難しいところです。分配のサインとしては、やはり目を見てくるとか、のぞき込んでくるとか、手を差し出すとか、そういうことになるのですが、それがどこまで時間的な広がりを持っているものなのか、時差を含んだ交換みたいな感じになっているのか、あるいは贈与交換ということになっているのかということまではまだなかなか踏み込めていないというところが、難しい、むずがゆ

いところではあります。

今、既に少し言ってしまいましたが、中川さんの分配の意思を伝えることなども結構難しいなという感じです。そういう意味では、あのときのお返しみたいなことを見出すのが、言語がないのでなかなか難しいということです。

逆に、総合討論で少しお伺いしてみたいのは、文化人類学で、例えば日本人の研究者が異文化のフランスやアメリカ、エチオピアなどに行って、そこの現地の人たちの相互行為の中の文脈や認識フレームというものを、どうやって理解できているといえるのか、考えられるのか。そういうところはどのように議論されているかということはすごく気になりました。同じ人間とはいっても、育ってきた環境も文化も社会も関係も違いますので、そのフレームというものがどこまで共通するものと考えたらいいのか。それはもしかしたらその先にサルというものが射程に含まれているかもしれないと考えて、私たちもそちらに勇気を持って踏み込むべきなのかと感じました。

松村さんのご意見も同様で、結局、主観や解釈からわれわれサル学者はやはり逃れられないのだと感じました。京大のインタラクションスクールに参加されているサル研究者の皆さんたちは既にやられていることだと思いますが、そういう解釈や、サルが主体的に振る舞うアクターとして、どういうフレームの下、やり取りしているという方向に掘り下げていくようなところに勇気を持って踏み込んでいかないと、やはり今われわれが言っている以上のことは分からないのかなと思いました。以上です。

（川添）　ありがとうございます。次は徳山さんから何か返答を頂けますでしょうか。

（徳山）　三人の方々にいろいろなコメントを頂いて、今まで私は動物行動の方の地盤で割とやってきましたので、あまり自分の中にない視点のコメントを頂けて、とてもありがたくて感謝しております。

最初は田辺さんからのコメントで、いろいろ頂いて全て返すことはできないのですけれども、最初の暴力というものは人格否定を伴うという点です。なかなか一回一回の攻撃行動について、それが人格否定を伴うのか伴わないのかというようなことや、こういう行動がボノボにとって精神的苦痛を感じるかということを考えるのは難しいのですけれども、何個かそういう人格否定といえるかなと思えるような事例があります。

それはオスに対するメスの連合の攻撃なのですけれども、ボノボのオスも８歳ぐらいになると結構、メスに対して少しちょっかいを出したり、攻撃的ディスプレイが多くなってきたりするのです。そうなると、あるときまでメスは我慢しているのですけれども、一気に怒りのボルテージに達すると、そのオスに対して非常に激しい、タコ殴りと言ってもいいような攻撃を仕掛けます。そうすると、オスはそれで多大なトラウマを植え付けられるようで、大体の場合、数カ月、集団からいなくなります。それはもう追放といってもいいような感じで

す。しかし、帰ってくると少しおとなしくなっているというような行動が見られます。それはオスは大体通る道という感じです。

もう１例、第１位のオスがいて、そのオスは私が見ていた５年間、ずっと第１位だったオスだったのですけれども、非常に強いオスで調子に乗って「おれは強いのだぞ」というディスプレイを繰り返していると、それもメスのかんに障ったのだと思うのですけれども、ある日タコ殴りにされて追放されるというか、群れから６カ月いなくなりました。帰ってくると、もうすっかりおとなしいオスになって、順位も１位だったのが３位、４位と落ちてしまったという事例がありました。そういう事例では、もしかしたら人格否定が伴うようなメスからオスへの暴力といってもいいのかなと思いました。

次は中川さんにコメントを頂いた点で、暴力の文脈です。ヒトだと借りを返しにいくみたいな点が見られるということだったのですけれども、これは確かにそうで、チンパンジーだとオス同士の出会いは大体、常に敵対的なので、相手を知るという機会がなくて、相手は攻撃してくる相手なわけで、ある意味、怖い存在です。怖い存在だからこちらも攻撃をするという点ももしかしたらあるかもしれなくて、ボノボの場合は、別にこちらから攻撃を仕掛けなくても、向こうが殺して来ることはないわけなので、そういう相互的な理解というものは、暴力があるかないかの基盤にあるのかなと思いました。

ボノボは、かなり集団の出会いの頻度が高く、そのときに毛づくろいなどの親和的な関係が生じて、また、コドモのころからもオス同士には付き合いがあるわけです。隣の集団のコドモをこちらの集団のオスが毛づくろいをしてあげることもありますし、コドモ同士が遊ぶこともあります。そうやっていい関係を築いてきているということも、暴力がないということの基盤ではないかと思いました。

最後に松村さんから頂いた、集団の意味がチンパンジーとボノボで違うのではないかというコメントです。これはときどきボノボの研究者としゃべることなのですけれども、チンパンジーとボノボの違いもあるけれども、オスにとっての集団の意味とメスにとっての集団の意味も少しあるよねというように話しているのです。オスにとっての集団とは、生まれたときからその集団にいて、血縁でつながっている可能性が高くて、さらにそのオス同士で協力してその中にいるメスを護衛して繁殖相手を防衛するというような意味があります。けれども、メスにとってみると、みんなどこかの集団からやってきたメスで、他の集団のメスと自分の集団のメスは血縁的にもそんなに変わりはないですし、そんなに集団にこだわる必要もオスよりはないのかなと思います。チンパンジーについては、集団内でオスが中心にいるので、集団間関係もオスが目立って、そういうオス主体の集団間関係になっているのではないか。チンパンジーにおいても、基本的に敵対的と言ったのですけれども、他集団のメスと少数のこちらのオスが出会ったときや、集団の違うメス同士が出会ったときは敵対的でないこともあり、毛づくろいなどが見られることもあるといわれています。ですので、チンパンジーにとってもメスはそんなに他集団というものは敵対的に振る舞う対象ではないのかもしれま

せん。ボノボにとっては、オスは先ほども発表内で述べたように、少し他集団はそれなりに敵対的な関係がある相手かもしれません。しかし、集団の主体性、中心がメスであることで、そのメスにとっての集団の意味が非常に強く出てきて、種の違いが見えてくるのかなと思いました。ありがとうございます。答えになっていればいいのですが。

（川添）　ありがとうございます。では、谷口さんからもお願いいたします。

（谷口）　ありがとうございます。たくさんコメントを頂けて大変うれしいです。ニホンザルということで、類人猿の方と比較してコメントを頂けるのかというのは若干不安だったのですけれども、貴重なコメントをありがとうございます。

田辺さんから共同育児傾向にある屋久島の方がアカンボウの死亡率が高く、出産率が低いのは残念というコメントを頂いて、高畑さんからもチャットで少しそのあたりのコメントはいただいたのですけれども、屋久島はサルの密度が高いのです。下北はスカスカでサルの密度がだいぶ低いのですけれども、屋久島は密度が結構高くて[1]、密度が高いと密度効果で産子数の減少や生存率の低下などが生じることがあるので、本当はあまりこの密度効果を考えず死亡率や生存率を単純に並べて、高いですね、低いですねみたいな議論は、もしかしたらナンセンスなのかもしれません。ですので、共同育児の屋久島の方が育児スタイルが適応的でないとか、そういう話ではないのかもしれません。少し、そのあたりの生態的な密度効果みたいなことは今後は考えて話しをしていこうと思います。

それから、屋久島は母親から離れやすく、その分他個体とやりとりがあったりするのですけれども、リスクはやはりありまして、よそのオトナのメスからアカンボウがかまれたりするような事例もあるのです。私も１回、母親がいないところで高順位のアカンボウが低順位のオトナのメスに、かまれるというような事例も見ましたので、母親から離れるということは、そのような時に守ってもらえないリスクもあるのです。だから、むしろヒトでは、よそのオトナから自分の子がいじめられるような、そういうリスクをどう減らして共同で育児をすることが成り立っているのかというのは、少しヒトの方からヒントがもらえるかなと思っています。だから、共同育児型、母親から離れて他個体に世話をされるのは、いいこともあると思うのですけれども、結構リスクもあるということは、ニホンザルを見て思いました。

次に中川さんからいただいたコメントで、相手にしてもらったからしてあげるようなことがあるのか。母親側の視点でみたら、うちの子の面倒をみてもらったから、こちらもよその子の面倒をみてあげるみたいなことがあるのかといわれるとよく分からないのですけれども、アカンボウの集まりが来たら、どの母親も他のアカンボウがくっつくことは許しているような印象ですので、きちんと分析してみないと分からないですけれども、少なくともアカ

[1] 半谷吾郎，座馬耕一郎，好廣眞一「サルの分布を決めるもの」『ニホンザルの自然社会』高畑由起夫，山極寿一（編）京都大学学術出版会，11–32 頁，2000 年.

ンボウの集まりがやってきたら、よその子を自分のさるだんごの輪にいれることはかまわないというようなことが屋久島では起こっているかもしれないとは思いました。

少しずれるかもしれないのですけれども、屋久島ですごく感動的だったのは、アカンボウが群れに８個体いたのですが、順位も家系も異なるメスが生んだ８個体のアカンボウが、3日に一回ぐらいは２メートル以内の円の中に集まって、移動や採食などを共にしていたのです。それを見ると、何かアカンボウ同士の仲間意識みたいなものが屋久島にはある気がして、そのあたりも今後表現できたらいいと思っています。

その関連で、最後の松村さんのコメントについてです。頻度や回数など数で表現すると、どうしても頻度の違いで、質的な差ではないのではないかということはよくいわれるのですけれども、今回そういう意味では、事例を出したことで質的な差が伝わったということはすごく幸せだったと思います。いつも悩むところなのですけれども、下北と屋久島は確かに量だけではなくて質的に違うのですけれども、それを科学論文として表現しようと思うと、どうしても表現しきれなくて、しかし事例を出すだけでは科学論文になりません。私が今、あいまいに言った母親が自分の子ではないよそのアカンボウもくっつくことを許すとか、アカンボウ同士に仲間意識があるということは、事例にすると何となく分かるのですけれども、数字で表現しようとするとどうしても表現しきれません。そこをどうしていこうかというのは、このコロキアムもヒントになりますし、今後の社会性科研のプロジェクトの中でも考えていきたいと思っています。ありがとうございます。

（川添）　ありがとうございました。本来の予定では、休憩を挟んでこの後、総合討論に移る予定でしたが、議論の時間をできるだけ確保したいということもありまして、このまま総合討論に移りたいと思います。総合討論は企画者の竹ノ下さんに議論の進行をお願いしたいと思います。竹ノ下さん、お願いします。

Ⅴ　総合討論

（竹ノ下）　よろしくお願いします。三人の演者の方、それからコメンテーターの方、大変貴重なお話をありがとうございました。事前に三人の演者の方の発表資料を頂いたときに、これだけ盛りだくさんで重厚な発表を三題聞かせて、コメントが15分で収まるわけはないだろうと思っていたら、案の定、非常に多くのコメントを頂きまして、しかも私自身はとても示唆的なことを得られたと思っています。皆さん、ずっと画面の前で聞いているだけで終わりたくない方がたくさんいらっしゃると思いますので、本当に手短に私自身のサマリーをして、あとは自由に発言していただきたいと思います。

やはり人類の社会進化とサルとを接続するときに、サルの意識、あるいはサルが何を考えているかということに真面目に向かい合うということが、どうしても必要なのだろうと思いました。サルを葛藤する存在として捉え、語る。その語り口をどうすればいいかということが、これから先、方法論を検討していく上で重要なのかなと思いました。

サルに何を考えているか聞けないのは確かなのですけれども、だからといってサルを考えない存在として語ってはいけない。ある分野でそのように語ることはいいと思うのですけれども、人類の進化と接続する上では、サルを考える存在として、葛藤する存在として語るべきなのだろうと思います。そのときに、文化人類学、社会人類学の分野の方々は、いわゆる自文化中心主義みたいなものに対する批判を克服するために、歴史的にも長い努力をされてきていて、それが霊長類学のように、自然科学的な枠組みで対象をアルゴリズムとして語るというのではない方法を模索されてきた分野の人たちから学ぶべきことがたくさんあります。実は自然科学の枠組みによる中立客観的な表現で語るということが、もしかすると究極のヒューマンセントリズムといえるのかなということを思いました。

私の感想というかサマリーはこんなところで、いろいろな方々からご意見を伺いたいのですが、お話をされたい方は、ぜひ手を挙げていただければ順番に指してまいります。

手が挙がりませんね。では、少し考える間に指名させていただきたいと思うのですけれども、高畑さんから幾つかチャットの方にコメント、質問を頂いていますが、徳山さんに対しての質問もあるようですので、高畑さんに口火を切っていただけると大変ありがたいです。

（高畑）　今回は口頭で質問するつもりは全くなく、チャットで質問するだけと思っていたのですけれども、まずお三方、素晴らしい発表でとても感心いたしました。

お三方と竹ノ下さんにお聞きしたいことは、この「ヒトを見るようにサルを見る」というテーマを与えられたときに、それで改めて自分の仕事を振り返って、新しい視点が何か加

わったというように自覚されたのかなという点です。

先ほどからサルの意識というか心理が分からないというような話が出ていましたけれども20年ぐらい前にある研究会で、ある文化人類の研究者の方から「サル屋さんはいいですね」と言われたことがあります。私の解釈ではそれは、サルはヒトが書いたものを読まない、だからサルから「おまえの解釈は間違っている」と反論されることはないということだったかと思います。研究者の立場から見れば、ある意味、強みになるのかどうか分かりませんけれども、われわれは結局、自分の主観を基に、谷口さんが先ほどいろいろとおっしゃっていましたけれども、それを何とか客観的に表現したいと思って、日々苦労しているわけです。その点で、竹ノ下さんがすごく苦労されてこの企画を考えられたわけですけれども、それによって自分たちのこれからを切り開く新しい視点、どんな視点を得られたか、そのあたりを少しお聞きしたいと思います。欲張りで申し訳ないのですが、以上です。

（竹ノ下）　ありがとうございます。私から答えた方が正々堂々としているのですけれども、少し演者の方に振りたいと思います。田島さん、いかがでしょう。

（田島）　はい、高畑さんの最初の「ヒトを見るようにサルを見る」というテーマを与えられて何か変わったかということだと思うのですが、私の個人的な考えでは、フィールドワーカーでサルの研究をしていて、サルの生活の現場みたいなものを観察して研究している人というのは、まず最初はヒトを見るようにサルを見ているのだと思うのです。それは、私は最初はヒトのことしか理解できないという状態でサルを見にいっているので、彼らが何をしているのかなというように見て、それをノートに書き留めていったりするのではないのかと思うのです。ただ、それがだんだん修士論文や博士論文、投稿論文、学会発表を経るうちに、何かそれなりの学問的背景や学問的なフレームみたいなものを獲得していって解釈の仕方が変わっていくのかなと、今、少し考えてみて思いました。ですので、「ヒトを見るようにサルを見る」というテーマを与えられると、私は結構自由というか、最初に直感的にサルの現場を見て思ったことを語ってもいいかなと思って、自由に語らせていただいたということです。

（竹ノ下）　徳山さん、いかがでしょう。

（徳山）　私も田島さんと全く同じで、やはり私たちが最初に行ってサルを見るときは、そのサルがどのようなサルかもまだ知らない状態、私だったらボノボを初めて見た状態で、「ああ、ボノボとはこんななのだ」と、最初に印象を得るのですけれども、その印象をどうにか形にしていくためには、どうしても何か定量的にデータを取って分析してみたいなことが必要で、しかもその最初の印象で、こういうデータが出てくるだろうなと思ったことと、実際

に出てくる結果が異なってきたりするわけです。それはそれですごく面白い気づきで、頭を抱えることもあるのですけれども、面白いところです。少し今ずれましたが、こういうテーマをもらったときに、結局、私は割とデータ的に示してしまって、「繁殖戦略って何やねん」みたいな感じになってしまったのですけれども、今いろいろなコメントを頂いて、もう一度、自分の印象を大切にすることをもっと大事にした方がいいのかなと、少し初心に返るような気持ちになりました。

（竹ノ下）　谷口さんはどうですか。

（谷口）　ありがとうございます。新しい視点というか、もうずっと避けていたことをやらせていただいたという感じがあります。昔、サルの離乳食とヒトの離乳食みたいなもので、ヒトの視点をとり入れて研究をしたことがあるのですけれども、そのときに、あまりヒトの特性をよく分かっていなくて、ずれた議論をしてしまったときに、「ヒトのキャッチーな言葉を使って、この人気とりが」と言われたことがありました。それ以来、ヒトとつなげた話しをすることが少しトラウマでした。今回は人気とりにならないように、ヒトとサルを同じ土俵で何とか語れないかと思ってやらせていただきました。成功したかどうかはかなり怪しいのですけれども、新しい視点に挑戦はできたと思っています。ありがとうございます。

（竹ノ下）　ありがとうございます。田辺さんの手が挙がっていますが、私が一言、話してからにしたいと思います。

これは高畑さんに対するかなり個人的なリプライになってしまうのですが、今回のコロキアムを企画するときに、学部のころに古本屋で買って読んだ80年代の『季刊人類学』で、高畑さんも入って「フィールドからわかるということ」というシンポジウムをやられていたと思うのですけれども、そのシンポジウムをもう一度、再現することができたらということを考えて企画しています。

その中で、高畑さんが「フィールドで何かを感じた以上、そこにはメッセージがあるはずだ」というようなことをおっしゃっていたと思うのですけれども、田島さんが言ってくれたように、最初に見た印象の中に、主観的と切って捨てられない何かがあるのであるということを信じて、それで作業的な方法論としては個体追跡をやったりといった客観的なデータを取って前に進んでいくということが、新しい知見というか、やはりそれが王道なのだろうということを改めて感じました。

そして今回、私は実は三人の演者の方がもう少し言葉や概念にこだわったお話をされるかと思っていたら、この表現が正しいのかどうかは分かりませんが、かなり抑制的な感じでサルそのものを語ろうとしてくださいました。しかも提示されるデータも、いわゆる客観的なデータを使ってお話をされたのですけれども、それに対してコメンテーターの方が非常に深

いコメントをしてくださったということも、私は今リアルタイムで、「ああ、このように語っていけばいいのか」というように感じたりもしています。

手が挙がっておりますので、田辺さん、お願いいたします。

（田辺）　せっかくの機会ですので少しポレミックに言いますけれども、田島さんと徳山さんがおっしゃった、最初の印象を大事にすることだというのは、僕は全然違うと思うのです。文化人類学者も最初よその社会に行くと、自分の常識でものを見ようとするのです。しかし、それでは分からなくなるわけです。そこからやはりデータの蓄積というものが重要になります。ただ、私たちの場合は、中川さんや松村さんもおっしゃったように、その文脈の全体というものを、より厚く深く蓄積していくことで理解しようとするわけなのです。インタビューができないとおっしゃっていましたけれども、人間が言うことなんて全然信頼できないのです。それは単なる言説としてはあるということで、その言説がどういう意味を持つかというのも、非常に厚みを持った装置、文脈といったものの中で初めて理解できるものなのです。だから、私はお二人がおっしゃったように、最初の印象がヒトを見るようにサルを見ることで、それから何か科学的なデータを蓄積するというものではなくて、文化人類学でも自然人類学でも、最初の印象は必ず間違うわけです。しかし、そこからもちろん私たちも数量データは大事にします。しかし、数量データプラス、やはりもっと質的なデータを見ることによって、私が言ったサルの意識性や主体性というものをもっと突っ込んで考えてもいいのではないか。そのためには、最初の印象を大事にするというよりは、よりデータを包括的に取っていって、文脈をより厚く理解していって、より総合的な理解を推進するということでなくてはいけないのではないかと思います。以上です。

（竹ノ下）　ありがとうございます。中塚さん、手が挙がっています。お願いします。

（中塚）　人類進化論研究室 M1 の中塚です。僕みたいな人がこういう場で発言していいのか非常に恐縮なのですが、僕からの質問というよりは、田島さんが文化人類学者のお三方に質問していたことの答えが聞きたいと思っています。僕も松村さんや中川さんの話を聞いていて、文脈というものがすごく人類学としては大事だということで、霊長類の研究をする上でも文脈ということを考えないといけないのだろうと思って聞いていました。けれども、やはりサルの行動を見る上で、サルの行動の中の文脈はサルにしか分からない文脈であって、人間がそれがどういう文脈なのかを理解するのはなかなか難しいところがあります。そこで、やはり文化人類学というものも、自分の文化の研究をする方もいらっしゃると思いますが、自分が属していない文化の研究をするに当たって、その文化における文脈をどのように理解しているのかということが気になりました。文化人類学者の方は参与観察といって、その文化の中に入り込んでその文化をよく見るという、僕はあまり詳しくはないのですが、そうい

うイメージを持っているのですが、サル、霊長類の研究においても、その文脈を見るということを考えると、それこそ解決策としては、やはり山極さんではないですけれども、「ゴリラになるしかないのだ」みたいなことになるのか。霊長類における文脈を見るという方法を取り入れるにはどうしたらいいのかということは、文化人類学者の方はどのように考えられているかということを聞きたいです。

（竹ノ下）　松村さん、お願いします。

（松村）　霊長類学者の方は十分その文脈を捉えるために、ずっと個体識別をして追跡調査をしたり、定点観測をしたりされてきたと思うのです。それは、人類学者が寝食を共にして、自分の文脈ではなくて彼らがどういう文脈に生きているのか、時間をかけて、先ほど田辺さんがおっしゃったように、自分が最初にとらわれている枠組みを捨てながら、何が起きているかを内側から理解しようとすることは、すでに霊長類学者の方々はやられてきているのではないかと思います。

しかし私が今回のご発表を聞いて気になったのは、最終的に分析するときの概念については、既存のよく使われている言葉を簡単に持ち出してしまっているのではないかというところです。多分、人類学者だったら、「なぜそれを日本語の戦略なんていう言葉で言うのだ」と突っ込まれたりすると思います。だから、観察やデータを取るという行為は、そんなに新しいことをすればいいというわけではないかもしれないし、田辺さんもおっしゃったように、むしろ新たなテクノロジーを使って新たな観察や、より脳波の分析をするなど、そういうことも込みでやること自体を否定しているわけでは全然ないのです。しかし、解釈するときの枠組み、言葉の使い方や、どういう概念に基づいてそれを分析するかというときに、せっかくデータを取ってその文脈を押さえようとしたにもかかわらず、全然違う文脈にある、ある種の客観的・科学主義的な用語がふっと入り込んでしまう。それをどう避けるかという方に気を付けた方がいいのではないかというのが、今回の発表を聞いた印象です。

（中塚）　ありがとうございます。

（竹ノ下）　ありがとうございます。今の松村さんのご発言は、私も結構同感です。つまり、結局、最終的に語るときにアルゴリズムとして語ってしまうということがとても染みついてしまっていて、なかなかそれは一朝一夕に脱却することはできない難しさがあると思います。そしてまた、これも私はそれほど文化人類学に詳しくないので言葉が上滑りしてしまいますけれども、では民族誌を書くようにサルを描けばいいのかというと、それもまた少し違うような気がしていて、何か糸口はつかめてきた気がするのですが、具体的な次の一手は何かというのはなかなか読めないようなところです。フロアの方で何かアドバイスを頂ける方がい

らっしゃるとうれしいのですけれども。
　では、徳山さん、お願いします。

（徳山）　少し議論からずれるかもしれないのですけれども、文脈は、サルを見ていると本当に難しいと感じることがよくあります。例えば先ほどの戦争で借りを返すみたいなことがありましたけれども、私が見た事例で、E1 群という集団と私が見ている PE 群という集団が出会ったときに、PE 群の一番強いメスであるボクタという個体が、E1 群の特に強くもないオスに殴られたのです。それはそれで、ボクタがキャーッといって逃げてその交渉は終わったのですが、次に出会ったときにそのボクタは、特に何をされたわけでもないのに、この前殴ってきたオスを執拗に追いかけていたのです。それを私は見て、ずっとあのときを覚えていて、ずっと恨みに思っていて、プライドを傷付けられたからやり返したのだろうなと思うのですけれども、それをどう証明するかは非常に難しいです。それがサルを研究する上で、人間もそうだと思いますが、文脈を解釈する難しさだと思いました。

（竹ノ下）　ありがとうございます。フロアの方。中川さん、お願いします。

（中川）　今の話は非常に面白かったのですけれども、人間でも基本的にはそうです。先ほども言いましたけれども、フレームというものはすごくあいまいで、人によって今の贈与が何かの反対贈与と思うか、それとも第一の贈与と思うかというのは常にあいまいな状態であって、確定しがたいものなわけです。だから、私たちもやはり人類学者として異文化というか他の社会に入っていって、その人たちがどういうフレームで見ているかというのを考えるときに、一つはやはりもちろん言語があるということなのですが、他にもいろいろなものを考慮に入れる訳です。ただし、言語も公共的なものです。別に相手に共感して内面に入り込むとかではなくて、外側から聞いて観察してできることなわけです。プラス、そこにおけるものや装置を通して、どのようにフレームされているかということが、よりはっきりしてきます。
　先ほど例として出した贈答帳のようなもの、葬式のときに渡しましたよという記録や、それに対してまた来たときに確認して、昔もらって返してもらったというような記録があると、それは反対贈与であるということが、よりフレームとして明確化します。ですので、人類学者も他の社会について見ていくときに、どういうフレームであるもののトランスファーが行われているのかというのも、やはりいろいろな外形的な、外から見える公共的なものを積み重ねていく中で見ていくわけです。
　ですので僕の質問は、先ほど内面に、サルにならなければ分からないみたいな話がありましたけれども、サルも結局そうではないのではないかということです。つまり、結局サルの思考は、僕たちが外側から見て想像するしかないというけれども、やはりサルも身体を使っ

て、あるいはものを使って、あるいは距離感を使って、何なのかは分からないですけれども、何らかのパブリックなものを介して、自分たちのインタラクションが何なのかということを想定しているのではないかという純粋な疑問なのです。結局、人間は分かるけれどもサルは分からないでしょうではなくて、サルのパブリックないろいろなものや身体を使ったコミュニケーションの中で見えてくるものがあるのかどうなのかという疑問を持ったということです。

（竹ノ下）　徳山さん、大丈夫ですか。まだ時間が15分ぐらいあります。足立さん、お願いします。

（足立）　京都産業大学の足立です。とても刺激的な、挑戦的なご発表、コメント、それからオーガナイズで、質問する勇気がなかなか出なかったのですけれども、解決はないのですみません、先に言っておきますが、解決策の提案ではないです。一つ、今日サル屋さんのお話を三つ聞いていて、私だったらこうするのになと思ったのに、お三人の発表の中にはあまり印象になかったと思ったのは、再帰性というか、自分がサルを見ているところをどこか別の視点から見るみたいな話があまりなかったように感じるのです。だから、ヒトを見るようにサルを見るということを考えたときには、やはり観察する私のことが気になってしまうという視点がどこかに入っていると、もう少しフレームや見るということが、深みというのかどうか私も分からないのですけれども、もう少し共通の話でできてくるかと思いました。

それは、例えば山極さんはサルになるしかないという、その山極さんのサルの見方と私のサルの見方を比較することができるわけです。山極さんはサルになりきってみたけれど、私はでは一体どういうスタンスでサルを見ているのだろうという、そこの見方の比較みたいなものができると、擬人主義とかそういうものにとらわれずに、見ていることについて考えることができます。

もう一つ言いますと、例えばオランウータンならオランウータン、ニホンザルならニホンザル、ボノボだったらボノボ、その対象のそのフィールドの研究者だけに分かる、「何かこんな感じだよね」というものがあるではないですか。これが、例えば一生懸命しゃべっても、やはり見たことがない人には分かってもらえない、あるいは誤解される、そういったことについての、やはり観察の中で積み上げてきた、観察する人の主観とサルの客観が入り混ざって出来上がった何かにアプローチする方法を考えるのが、エスノプライマトロジー（民族霊長類学）といわれているもので、それはただ民族誌を書くように書くわけではなく、そういうことをやるというところに新しさがあるというか、もうどうしようもなくなってきてこうするしかないという、少し苦し紛れのやり方としての道があるのではないかと今考えているというコメントです。

（竹ノ下）　ありがとうございます。調査をしている自分自身を含めて見るという視点は非常に重要な指摘だと思います。といって、その議論を引き取って広げる力量がなくて恐縮なのですけれども。

今のことに関連してしばしば思うことがあるのは、観察者の性差です。徳山さんに振るのですけれども、以前ワンバでボノボの調査をされている、とある女性研究者に、ホカホカというのはセクシャルですかと尋ねたことがあります。そうしたら、その方は「私には全くセクシャルには見えません。あれは男が興奮しているだけだ」と言われたことがあるのですけれども、徳山さんはどうお考えでしょうか。

（徳山）　私も全くセクシャルには見えず、男が興奮しているだけ（笑）。観察者の性差というのは多分すごくあると思っていて、個人差もあると思うのですけれども、例えば高畑さんがチャットに少し書いてくださっていましたが、ボノボの攻撃性というのは、ボノボの性皮の長く続く腫脹と関連しているというのが随分長い間メインの学説というか、ボノボのメスの発情期間が長いのでオスの競争が減って、それでオスたちが平和になったというようにいわれていました。それはすごく男性的な視線だと思っていて、私が見ると、実際オスは長い発情期間の中でもメスが受胎できる期間というのはどうやら理解できている、きちんと見えているように見えますし、データで見ても、結果的に高順位のオスが受胎できる発情メスをほぼ完全に独占しているというような結果も出ています。私はどちらかというとメスとオスの関係性の違いに注目して研究を進めてきたので、その辺はかなり、見ている側の性別の違いや個人差が強いと思いました。

（竹ノ下）　ありがとうございます。大村さん、お願いします。

（大村）　三人のサルの方、非常に面白いお話をありがとうございました。また、ヒトの方で三人の人類学者の方のお話、素晴らしいコメントをありがとうございました。一応、一回目の「サルのようにヒトを見る」の企画に関わった者として、やはり何か言わなければいけないだろうと思います。実はもうお話を聞いていて、あまりにも深い内容へと潜っていくので、私自身まだ考えがまとまっていないのですけれども、まさにずっと聞いていて思ったのは足立さんが指摘された点です。やはり文脈の中に自分が入っているという問題があって、先ほどどなたかが人類学の一般的なイメージとして、内側からその人たちを見ると言いましたけれども、実際は人類学はヒトをやる場合にはそういうことがやはりできるわけではなくて、内側に入れないですよね。例えば僕がイヌイトになることはできないし、暮らすことはできても生かしてもらっているだけで、その実はよく分かっていない。まさに田辺さんがおっしゃったように、ヒトはうそしかしゃべらないですから、サルが分からないといえば、ヒトだって分からないわけです。公共的な場面で、物理的な現実のコンテクストを見ていくとい

うことで、もちろんある程度推定はできるけれども、中川さんがおっしゃったように、ヒトによってやはりコンテクストが違ってくるという問題の中で、文化人類学もそれほどサル学と違わない状況なのです。

ただ、そのときに人類学は科学的客観性ということを昔やっていた時期が確かにあります。例えば僕は在来知を昔やっていました。何かいつの間にか人生が狂ってしまいましたが、在来知をやっていたのですが、昔は認識人類学というのは、基本的には科学的な知識を基準にしてローカルな在来知をやっていくというようなことをやっていたわけです。それがある種、限界が見えてきて今の議論につながっていきます。

その話をすると長くなってしまうのでしませんけれども、一つそのときの重要なポイントは、先ほど高畑さんがおっしゃっていた「サルの人はいいね」と言われたという話です。サルは読まないからということなのですが、現地の人が読むということを、すごく単純化して大胆に言ってしまうと、今の文化人類学では、現地の人が読んで何か新しいことが起きるということをポジティブに見ていくのです。つまり、自分が中に入っていって、僕が自分自身を実験台にしていろいろなことを結び付けていく、相互行為の連鎖が起きていく中で、その相互行為をどのように切り分けるのかということが、ある種のコンテクストをつくっていくと思うのですけれども、それは、自分が入っていく中である程度のコンテクストがやはりできてしまいます。それは主体や客体、間主観性といった難しい話というよりも、ごく普通に考えればそうなわけです。その中で明らかになっていったことが、では客観的なのかというと、もちろん客観的ではありません。では主観的なのかというと、どこまでも主観的でもありません。ただ、文化人類学の場合だと、部分的にしか翻訳は可能ではないし、本当のことはよく分からない。そうすると、やはり評価の問題が出てくるわけですね。翻訳して、どこまでそれはどうなのか。まさにそれが擬人化の問題につながっていくと思うのですけれども、そのように考えた場合に、これは僕の意見でしかないかもしれのないですけれども、ある種のプロダクティビティ、生産性、自分がフィールドで自分を実験台にして何かをやって、何か出てくる。それが客観的で真実であるかどうかは、結局、分からないわけです。内在的にしか僕らには分からないので、その内在性の中で考えていくときには、どういう生産性につながるのかということが、むしろ重要なのではないでしょうか。

ですので、随分議論に出てきましたが、擬人化も、擬人化しているから全部いけないのだということではなくて、田辺さんもおっしゃっていましたけれども、ある目的のためには擬人化はむしろ適切な場合がある、もちろん別の場合には擬人化は不適切な場合があるということだと思うのです。問題なのは、やはりターゲットをどうするかということであって、研究も結局、社会に埋め込まれているので、その埋め込まれた中で、単純に啓蒙しようとか批判しようということではなくて、その社会に埋め込まれた中で、自分のやっていることがどういう生産性を生み出すかということを考えた上で、では、ターゲットをどうするかということによって、ある部分、擬人化がＯＫですし、擬人化はむしろ良くないということもあり

ます。あくまでもその客観性や科学的真実というものをいったん置いておいて、結局よく分からないのですけれども、次の議論へつながるようなもの、例えばこの科研だと社会性がテーマですけれども、社会性の進化の起源について、僕も腹案があって言っているわけではないので本当は今しゃべりたくなかったのです。しかしべらべらしゃべっていますけれども、時間を取って申し訳ないのですが、やはり社会性の起源と進化ということを考える上で、細かいターゲットをまたつくっていかなければいけないわけです。それをどう考えるかということから、やはり擬人化の問題も考えなければいけないと思いました。

その際に重要なのは、単にフィールドで自分が調査をしていますということだけではなくて、文化人類学では随分言っていますけれども、ポストコロニアルなどの議論ではそういう話になるわけですけれども、もっと広い文脈である程度考えながらターゲットを絞り込んで、その上で記述をどうするかという話になるのではないかと思いました。

腹案が全くないので申し訳ないのですけれども、すみません、時間を取ってしまいました。

（竹ノ下）　ありがとうございます。床呂さんの手が挙がっていますので、時間的に、最後に締めるような感じでお願いします。

（床呂）　すみません、全然締めるようなことは言えないのですけれども、AA研の床呂と申します。今日は本当に三人の大変刺激的なご発表と、非常に素晴らしい包括的なコメントを頂きましてありがとうございました。ほぼ既にコメントも含めて言い尽くされていることかと思うのですけれども、一言だけ。今、大村さんのおっしゃった擬人化の問題です。私も基本的に大村さんがおっしゃったことにかなり同感なのですけれども、最初に竹ノ下さんから擬人主義の陥穽みたいなお話があって、そこでおっしゃっていることの文脈は私もある程度分かるつもりなのですが、他方で、擬人化も擬人主義自体がいけないというのではなくて、その中で、例えば大村さんも少しおっしゃったヒューマニスティックなというか、方法論的にまず仮に擬人主義的な方法を採って、かといって、しかしそれは必ずしも人間のカテゴリーを全て人間以外の動物に当てはめるのではないということかと思います。

これは、恐らくヒト対ヒト以外の生き物ということだけではなくて、文化人類学でよくある、いわゆる西洋中心主義やエスノセントリズム批判と、非常にある意味ではパラレルなのかと思います。人間における例えば暴力とか愛とか、そういうものを当てはめていいのか悪いのかというような話は、実は人類学の中でも散々いわれてきました。つまり、そもそも愛などという概念は西洋の中世ヨーロッパでの発明品であってうんぬんといわれますし、子どもという概念についてもよくいわれます。フィリップ・アリエスの「子供」という概念自体が、実は非常に近代的な構築物であるうんぬんみたいな話がいろいろあったかと思うのですけれども、そのように考えていくと、ある意味では文化人類学、霊長類学双方で共通する部分で、その中で逆にいうと、少しこれは分野外からの勝手な感想かもしれませんけれども、

日本の霊長類学の場合、田辺さんのコメントにも少しありましたが、ある意味で、いい意味での擬人主義みたいなことのポジティビティ、良さみたいなものもかなり発揮できた分野なのではないかという勝手な感想も負ぶっているわけです。

例えば文化の概念なども、いまだに欧米を含めて文化というものは人類、ホモサピエンス特有のものだというようなある種の先入観がある中で、霊長類も含めて、その文化というような概念を非常に提唱したとか、これも広い意味での擬人主義といえるわけかもしれないですけれども、その良さも含めて、いろいろ開拓というか、含み込んできた分野かなということで、今日は非常に面白く伺いました。何か全然まとめるコメントになっていなくて、申し訳ないです。

（竹ノ下）　ありがとうございました。そろそろ時間になりましたので、総合討論はこのあたりで締めたいと思います。冒頭で申し上げたように、実は私は割と嫌々引き受けたのですけれども、嫌々引き受けたというのは演者の方に言うと失礼なので今日まで黙っていたのですが、非常に私自身、これほど高い満足度を得られたことに驚きと感謝の気持ちでいっぱいです。参加者の皆さんも含めて、ありがとうございました。

それでは総合討論はここまでで締めさせていただいて、最後に川添さんに業務連絡等を含めて、お返しいたします。

（川添）　ありがとうございます。今日は予想よりも多くの皆さまに参加していただきました。長い時間ありがとうございました。今日は私自身は発表しなかったのですが、私も三名の発表者と同じように「客観的」と思われるデータの取り方をしてアルゴリズム的な分析をしていますが、その過程でもやはり、これでいいのかなという悩みはいろいろとつきまとっています。何をしたらいいかはまだ具体的には分からないのですけれども、何を考えていけばいいのかということは少しヒントをもらえたような気がして、私自身にとっても大変刺激的な研究会になりました。ありがとうございます。社会性科研とも連携しながら、今後もこういった人類学と霊長類学で議論を続けていきたいと思いますので、また皆さま、よろしくお願いいたします。

では、今日は長時間にわたる研究会でしたが、ご参加いただきありがとうございました。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス研究企画センター
「フィールドサイエンス・コロキアム」

科学研究費補助金基盤研究（S）
「社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究
「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探究―人類学におけるミクロ−マクロの連関 2」

共催研究会
ヒトを見るようにサルを見る

編　　集：河合香吏・竹ノ下祐二
編 集 補 佐：川添達朗・谷口晴香
発　　行：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1
印 刷 ・ 製 本：株式会社ワードオン
〒335-0004　埼玉県蕨市中央 7-56-3
表紙デザイン：川添達朗
表 紙 写 真：（上）田島知之・（中）徳山奈帆子・（下）谷口晴香
発 行 年 月 日：2024 年 9 月 2 日
ISBN：978-4-86337-538-3
©2024 Individual Contributors

この作品はクリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンスの元に提供されています。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

ISBN 978-4-86337-538-3

科研費 KAKENHI
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所